魔法少女リリカルなのはStrikers～No Future Darkness～

ポッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒｓ～Ｎｏ　Ｆｕｔｕｒｅ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ～

【Ｎコード】
Ｎ９９０５Ｓ

【作者名】
ポッキー

【あらすじ】
海鳴市を舞台にして起こった事件、『闇の書事件』。
それから一年がたち、剣也たちは小学生として、時に遊撃部隊『ＮＦＤ』として過ごしていた。
そこに、管理局から一つの任務が通達された。
これが、すべての始まりになるとは知らずに・・・
これは、光ある未来のためにすべてを尽くす一つの部隊と、それを取り巻く友人たちを中心とした物語である。

さあ、新たなる物語を始めよう――――

（これは魔法少女リリカルなのはA、ｓ～Ｄｏｎ、ｔ　Ｆｏｒｇｅｔ　Ｓｔｏｒｙｓ～の続編です。なるべく前作を読んでから、この話を読んでいただけると、話がわかりやすくなるかと思います）

エピローグ（前書き）

初めましての方は初めまして。久しぶりの方はお久しぶりです。この作品の作者である、ポッキーと申します。
前作『魔法少女リリカルなのはA、s～Don、t Forget Storys～』から一年後の世界が、この作品のスタートとなります。
相変わらずのだめ作者ですが、どうか最後までお付き合いくださると、うれしいです・・・
では、エピローグをどうぞ。

エピローグ

Ｅｐｉｌｏｇｕｅ

季節は春。桜もちょうどいいくらいに咲いている。
「・・・」
海鳴市の山の中腹の広場。そこに一人、少年が立っていた。
肩に少しかかるくらいの漆黒の髪。絵の具を流し込んだかのような赤い双眸。
右腕には、剣十字が刻まれた銀色の腕輪をはめている。左の中指には、二本の剣がクロスしたような装飾が施された指輪がはめられている。
突然、強い風が吹き、あたりの桜の木が揺れた。ピンク色の花びらが少し散り、少年の掌に落ちる。
「あれから、結構たったな」
ぽつりとつぶやくようにそう言うと、ほんの少し顔をあげて空を見た。
「いろいろなことがあって、大変なこともあったけど…なんとか無事にこうして生きてる」
思い出すかのように、そう言った。
「俺ももう、五年生か」
この少年こそ、約二年前に起きた「闇の書事件」の解決者の一人――御崎剣也である。

初めましての方は初めまして、久しぶりの方はお久しぶりです・・・
この物語の主人公である、御崎剣也です。
今は散歩の帰りで、家に向かって歩いているんですが・・・
実は自分、目が見えません。
すべてのものが見えないというわけではなく、物の形だけがわかる

という不思議な目。それ以外の文字や絵、物体の細かな形とかは全くわかりません。たいていなにもものがない場合、自分の目にはただまっ黒な世界が広がるだけだったりします。
ただ、もう一つ見えるのがあります。それは、人の感情を色でとらえられるということ。
怒っていれば赤、悲しんでいるなら青、楽しければ黄色、うれしければ桃色と言った感じに。
それ以外にも、もう一つ見えるのがあるんですが…おっと、家についてしまった。
「ただいまー」
「お帰りなさい、剣也」
「お帰りー」
「長い散歩だったな」
「ま、たまにはね」
リビングにいるであろう星菜、千早、美妃の声を聞きながら洗面台に向かい、手を洗ってうがいをする。
「母さんは？」
「買い物に行っています。そこまで荷物は多くないので一人で行くと」
「ふーん・・・」
三人は俺の家族ではない。とある理由でこの家で一緒に暮らしている。
俺の家は今まで二階建てだと思っていた・・・のだが、実は地下室があるということを三人がすむと決めたときに初めて知った。
何でも「なにかたいへんなことが起きたとき用に」作っていたらしく、食料も備蓄してあり、時々掃除もしていたらしいのですむのには全く不快ではない。
広さも結構あり、三人がすむのには十分すぎる広さだった。
「まだ3時くらいかぁ・・・ひまだ」
「そう言われましても、何もないですよ？」

確かに、訓練は今日お休みの日だし、誰かの家に行くにしてもな・・・

〜ゆっくり休むのも大事ですよ？マスター〜

「ま、そうなんだけどな」

落ち着いた女性の声が響く。発信源は俺が付けている腕輪からだ。

これは俺の相棒である『ネクサス』。約二年前から一緒にいる。

ああ、そう言えば言ってなかったね・・・実は俺、魔法使いです。

剣也が魔法とかかわることになった事件、それはとあるロストロギアが原因で起こってしまった事件だ。

『闇の書事件』――――世間一般には、こう呼ばれている。

すべてのページを完成させれば、その主にとてつもない力をもたらすと言われてきた魔導書。だがそれは嘘であり、時代をまたぐにつれて改変され、最後にはその主を食らいつくし、その世界を滅ぼしかねないという最悪の魔導書だった。

その完成に必要なのが、魔力をもつ者からの魔力の蒐集なのだが、剣也は自分に魔力があることを知らず、その闇の書の守護騎士であるヴィータに襲われた。

主が大変なことになっていることを知り、剣也は自分から進んで魔力を渡すが、これこそがすべての始まりだった。

魔法との出会い、管理局の裏、そして、友達だと思っていた人物の衝撃の事実。

それに負けず、剣也は進み、闇の書の防衛プログラムと激突した。

対処に当たっていた「高町なのは」、「フェイト・テスタロッサ」と協力し、事前に闇の書・・・いや、「夜天の書」の作者である「ウィーグル・アルトリア」から受け取っていたネクサスを使用し、魔導師として戦った。

背中に白金の翼を広げ、純白のジャケットを着た剣也はその後『白金の騎士』と呼ばれ、事件を解決した一番の立役者として記録されている。

さて、なぜ目の見えない剣也が魔法に対処できたのか・・・それは、先ほど彼が話しかけたことにある。
彼は、魔力を持っているものすべてを見ることができる。使っている人の魔力光も含めすべてだ。
それにより、魔力を見ることにより対処をすることができたのだが・・・闇の書の管制人格との戦闘では、相手の魔力光が黒だったのが災いしきつい戦闘を味わうことになった。
その後起こった『闇の書のかけら事件』でも活躍し、突如参入した友人の『水無月弓弦』と協力してその事件を解決した。
その事件を起こした当人、『星光の殲滅者』、『雷刃の襲撃者』、『闇統べる王』を引き取り、今の様な状態になっている。

[私も思うが、剣也は少し働きすぎの様な気がするぞ?休める時に休まなければ、後で大けがをするかもしれないからな]
「アインスまで・・・」
と、今度は俺自身から声がする。別に口があるわけじゃない。俺の中にいるもう一人のデバイスの声だ。
名前は『リインフォース?』。夜天の書の管制人格で、今までつらい旅をしてきた。
度重なる回変のせいで、暴走プログラムの破壊ができないために、自分が消えようとしたのだが・・・俺が先に管理局の方に相談していたこともあり、無事にプログラムの摘出と破壊をすることができた。但し、それを行うには誰かの体が必要と言うわけで、俺が立候補し、現在の様な状況になっているわけだ。
ちなみに『?』は、はやての方にアインスの方から「私は常にそばに居られませんので、代わりに私の意思を継いでくれるものをそばに置いておいた方がよいかと・・・」
ということで、二代目を作ることが決定。名前が『リインフォース?(ツヴァイ)』というわけで、俺の中にいる初代の方が「アインス」となったわけだ。

もうそろそろで作るらしいので、少し楽しみだ。
「連絡が来たら私達の方で何とかしますので、自室に戻って寝るなり本を読むなりしていてください。どうしてもという時だけ呼びますから」
「・・・わかった。そうさせてもらうよ」
星菜にも言われたので、階段を上って自室に入る。
飛び込むようにベッドにうつ伏せになり、ころりと寝がえりを打って天井を見る。
「…寝るか」
そのまま、目をつぶるとあっという間に意識は闇に消えていった。

「全く、あの隊長は少し自分の体のことを考えてほしいものです」
「確かに。週の4日は朝5時前から訓練して、学校行ってまた訓練。それに書類と宿題までやって・・・」
「それがない日でも、勉強や仕事の方に力を入れているからな…」
『はあ・・・』
私たち三人はため息をついた。確かに隊長というものはみんなを守るというのはあるし、いろいろなことをやらないといけないというのもわかる。
だがこの年でこんな生活を続けていたら早死にするだろう。
「あと二人か三人、部隊員が増えれば仕事も楽になると思うのですが・・・」
「遊撃部隊だから、それ以上にすると普通の部隊になるし」
「リミッター―なんぞ付けたら、いざという時に全力で戦えないからな」
弓弦はこのことを見こしてリミッター―制限のない遊撃部隊にしたのだが、それが今となってはこんなことになっている。
提案した当人も大変なことになっているらしいが、大丈夫なのでしょうか？
「どこかの世界の出張任務か何かで、有望な人を見つけられたらい

いのですが・・・」
そう言うと、私は湯飲みに入った緑茶を飲んだ。

「ただいまー」
「お帰りなさいませ、母方」
「お帰りなさーい」
「お疲れ様です、母上」
三人から元気な声が聞こえた。ちゃんとした家族じゃないけれど、やっぱりたくさん人がいると楽しいわね。
「あれ、剣也は？」
「自分の部屋にいると思いますが…どうかしましたか？」
「ううん。特に何もないわ」
買い物袋を下して、ソファに座る。
「どうぞ」
「ありがとね、星菜ちゃん」
湯呑にお茶を入れて渡してくれた。この子たちが最初来た時は、挨拶と礼儀作法とかを教えるのに苦労したけど・・・今ではまじめに手伝いとかもしてくれるし、助かっている。
「剣也にお菓子でももっていってあげましょうか」
「なら、僕も手伝うよ」
「助かるわ」
お盆にお茶とお菓子を載せて、二階に行く。
ノックをすると、［どうぞ］とアインスちゃんの声がした。
「入りますよー・・・あら」
「ぐっすり寝てるねぇ」
そこには、まるで女の子みたいな顔をして寝ている剣也の姿があった。
「すぅ・・・すぅ・・・すぅ・・・」
「起こすと悪いし、帰りましょうか」
「そうだね」

はだけている布団をかけ直して、部屋から出る。
「どうでしたか？」
「ぐっすり寝てたわ。よほど疲れていたんだと思うけど」
「そうですか・・・」
美妃ちゃんがため息をついた。やっぱり心配してるのかしら？
「そうだ！今日は疲れてる剣也のためにも、ごちそう作っちゃいましょう！」
「いいですね。スタミナのあるものを用意しておきましょう」
「よーしっ！頑張るよーっ！」
「腕が鳴るな・・・」
そして、四人でのごちそう作りが始まった。

「う・・・ん」
［ずいぶんぐっすりと寝ていたな、剣也］
〜よほど疲れていたようですねぇ〜
「ま、最近いろいろやっていたからな・・・」
ほぼ毎朝の練習に学校、夕方から夜にかけての訓練＋宿題やら書類（アインス補助）。
体が疲れているのもわかるんだが、どうしても体が動いてしまう。
「今、何時？」
〜午後７時ちょっと前くらいですね。もうそろそろ夕飯ができているころだとは思いますが〜
「結構寝てたな。夜が心配だ」
ドアを開けると、下からいいにおいがした。
「もうできているのか・・・にしては量が多い気が」
［確かに、いろいろなにおいがしますね］
〜うう…アインスがうらやましいです〜
「仕方ないだろ？ネクサスとは感覚共有ができないんだから」
感覚の共有というのは、体の中に取り込んだアインスと一部の感覚を共有するという一種の荒技だ。それにより、自分は一時的にだが

普通の人と同じ視界を得ることができる。
そのほかにも、味覚や触覚の共有もできるので、いろいろなことに役立ったりするのだが・・・それについては、あとあと語ることにして。
「お目覚めですか、剣也」
「星菜・・・千早に、美妃まで？って弓弦、なんでお前が！」
「今日母さんが急に残業になってな。晩飯貰いに来たら手伝ってくれって」
「はあ・・・」
いつもの五人全員集合だなぁ。
「父さんも、珍しいね」
「いつもがんばっているお前のためを思えば、苦でもないさ」
「はいはい！もう準備できるから座ってねー！」
「う、うん」
自分の定位置に座り、ほんの少し深呼吸をする。
「じゃあ、みんな手を合わせて」
『いただきます』
総勢7人での夕食会が始まった。

そこからはもう戦場と言っても過言ではないかもしれない。
次々に料理にくらいつく千早と弓弦。
それを気にしないとばかりに落ち着いて食べていく剣也、星菜、美妃。
少しお酒を交えながら、新婚夫婦の様に食べるほのかと一真。
『平和』という言葉が一番ぴったりだろう。
だが、少年と少女達には、裏の顔があった。
三提督直属特別遊撃部隊、『ＮＦＤ』。それが、彼らのもう一つの顔である。
隊長の剣也、副隊長の弓弦に、部隊員の星菜、千早、美妃。それが今の構成員である。

現在は特につらい任務もなく、普通に過ごしているが、もうそろそろで少しハードな任務が来るのは全員薄々と感じていた。
だが、そのことを剣也に聞くと、たいていこう答える。
『負ける気なんてないですよ？なぜかって？それはですね…みんなのことを、心から信頼しているからですよ』
そう、笑顔で答える。
彼らの前になにがあるかは、まだわからない。
この物語は、光ある未来のためにすべてを尽くす一つの部隊と、それを取り巻く友人たちを中心とした物語である。
さあ、新たなる物語を、ここに記そう――――

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｓ～Ｎｏ　Ｆｕｔｕｒｅ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ～　始まります。

エピローグ（後書き）

剣也「ただ今、帰ってまいりました！主人公の御崎剣也です！」
ポッキー「作者のポッキーです！」
剣也「今作品から、この作品のキャラクターがこの後書きに出ることになりました」
ポッキー「読者様から頂いたコメントや、感想に対して返していく感じです」
剣也「で、この後書きに名前でもつけるって言ってたけど…どうするの？」
ポッキー「まだ決めていません！と、言うわけで読者の皆様、『これぞ！』というのがありましたら、コメントの方にどしどし書いていってください！」
剣也「募集期間は？」
ポッキー「5月の中旬、大体15日くらいまでには決めて、その後の話で発表します」
剣也「コメント、待ってま～す！」

ポッキー「さて、新しく始まりましたこの作品。オリジナル展開や、原作ブレイクがあります。
それが苦手という方は、なるべく読み進めないことをお勧めします・・・
それが大丈夫という方は、どうかこの作品に最後までお付き合いいただければ、うれしいです・・・」

ＮＦＤメンバー＆デバイス紹介（前書き）

長い！作るだけでも相当時間かかりました・・・
追加デバイスなどもあるので、興味のある方は見ていってください。

２０１１　１１／１２　フリューゲルの設定追加

NFDメンバー&デバイス紹介

御崎剣也：部隊長　　ＣＶ：宮野真守さん／セットアップ時：日笠陽子さん
年齢：１０歳
魔力光：白金
血液型：Ｂ型
魔力数値：ＳＳＳ＋
魔導師ランク：ＳＳ＋
本作品の主人公。文字や絵が見えず、物体の大体の形と感情を色で識別する特殊な目を持っている。さらに魔力を持った物（そのものの魔力光を含む）を見ることも可能。
以前よりも髪を少し伸ばし、肩にかかるくらいまでになった。運動の時はヘアピンで留めている。
人には優しく接し、感情の変化を見ることによって空気を読むこともできたりする。
自分の大切な物・人を何の気もなしに侮辱されたり傷つけられたりすると性格が一変し、乱暴な口調になることもある。
戦闘時は近接格闘・中距離、遠距離射撃を使い分けるオールラウンダー。レアスキル「蒐集行使」によりあらゆる場面での戦闘を可能にする。
バリアジャケットは夜天の書の意思のジャケットを少し変えたような形。白を基調とし、袖は長袖。靴下も両方はいており、拘束具の様なベルトや赤い装飾はついていない。
ただプログラムのせいかセットアップするたびに性別が変わり、女性になってしまう。
以前よりも少しスタイルがよくなり、本人はそれを悔やんでいる。
その膨大な魔力と、多種多様な魔法を使い戦場を駆けるその姿は、『白金の騎士（女騎士）』とも呼ばれる。

・レアスキル
○蒐集行使
夜天の書の主である「八神はやて」のレアスキルと同じもの。今まで夜天の書に徴収された魔導師の魔法を使うことができる。以前は知っている者の魔法をよく使っていたが、今は昔の魔導師の魔法も使うようになった。
○サイレント・ヒーリング
魔法陣を発動させることなく回復魔法を使うことができる。今ではシャマルの手ほどきにより高度な回復魔法や広範囲での発動も可能となった。

ネクサス：インテリジェントデバイス
製作者：ウィーグル・アルトリア
管制人格：女性型
使用可能術式：古代ベルカ&ミッド式
闇の書事件の際、剣也の夢の中で夜天の書の制作者「ウィーグル・アルトリア」から渡されたインテリジェントデバイス。
待機形態でも、戦闘時でも形は変わらず、銀色の腕輪に剣十字のマークを刻んだようなもの。
性格は落ち着いた女性の様な感じだが、感情をあらわにするときは少し口調が変わる。
超巨大なデータ収納庫を持ち、夜天の書のデータなどすっぽり入るくらいの大きさ。アインスのデータを入れてもまだ余裕があったりするほど。
感覚を共有できるアインスのことをうらやましく思ったりしている。

・フリューゲル：アーマードデバイス
製作者：ウィーグル・アルトリア
人格：女性型

使用可能術式：古代ベルカ式
ウィーグル・アルトリアによって作り上げられたの補助型デバイス。マシンモード、バトルモード・アーマードモード、マキシマムモードの変形が可能。
マシンモードは飛行機のような状態になり、高速機動ができるため索敵などには最適。（ウルトラマンネクサスの『ストーンフリューゲル』の様なもの）
バトルモードは人型の様な形態で、戦闘力はまあまあ。（遊戯王の『E・HEROプリズマー』を全体的に銀色にして、ところどころに赤い装甲がついたようなもの）
アーマードモードは使用者の追加装甲として機能し、機動力や魔法の威力を上げる。シャイニング・ノアよりも威力が低い『オーバー・クロスレイ・シュトローム』を発射可能。燃費がいいので2発程度なら連射できる。
マキシマムモードは弓の様な形に変形し『アローレイ・シュトローム』を発射可能。

リインフォース？：ユニゾンデバイス
製作者：ウィーグル・アルトリア
人格：女性型
使用可能術式：古代ベルカ&ミッド式（少し）
元『夜天の書』の管制人格。現在は防衛プログラムの破壊の代償として剣也の体に入っている。（入られた本人は特に気にしていない）感覚を共有することで、食べ物の味がわかったり、触れたものの肌触りなどを感じることもできる。
モードシフト『ナイトスカイ』のコードで剣也と体を入れ替えることができる。その時剣也は精神と魂がネクサスに移り、入っている間は一時的に体を休めることができる。
そのため、大ダメージを受けた際のために緊急の入れ替わりプログラムがセットされており（剣也はそのことを知らない）、いざとい

う時は瞬時に体を入れ替えることができる。
バリアジャケットは闇の書の意思として戦っていた時とあまり変わらないが、赤い装飾や拘束具の様なベルトはなくなっている。
ユニゾンしたときは、剣也のジャケットを主体に髪は銀色、背中の羽が二対になり、上の方が白、下の方が黒の羽に変わる。
使用する魔法は自分自身のものを主体として使うが、時折蒐集した魔導師の魔法も使う時もある。

不知火：ストレージデバイス
制作者：マリエル・アテンザ
管制人格：無
使用可能術式：刀身の強化魔法のみ
近接戦闘用に作ってもらった剣也のデバイス。魔法がきかなかったり発動できなかったときなどのために作ったが、普通に使う時も多い。
待機形態は指輪に二本の剣がクロスしたような装飾が施されたもの。
戦闘時は「シングルモード」「デュアルモード」の二つに変化し、一刀流と二刀流を使い分けられる。形は日本刀の様な感じで、持ち手が黒く染められ、刀身は銀色。鞘は灰色になっている。

水無月弓弦：副隊長　　ＣＶ：宮下雅也さん
年齢：１０歳
魔力光：濃い青
血液型：ＡＢ型
魔力数値：ＡＡＡ＋
魔導師ランク：Ｓ＋
剣也の一番の親友であり、最高のライバル。体を動かすのが好きで、毎日のトレーニングはほとんど欠かさない。
性格は少しクールで、あまり目立とうとはしない。男友達には名前

で呼び、女友達には名字で呼ぶというちょっと変わったこだわりを持つ。
ひょんなことから異世界から飛ばされてきた『ファイ』を拾い、その流れで魔導師に。
持ち前の運動神経とその実力のおかげで、そこまで苦労することなく魔法を覚えた。
近接戦闘が大の得意であり、いったんその間合いに入るとたいていの敵はなぎ倒される。
砲撃や射撃も使えるが、そこまで多様はせず不意打ちなどに使うことが多い。
バリアジャケットは『仮面ライダー５５５』を、ラインを青色にし、仮面を無くした状態。
防御力が高く、並みの魔道士なら傷つけることさえ難しい。
闇夜を切り裂くようなその近接戦闘の素早さと、体に流れるその光から『青色の閃光』とも呼ばれている。

ファイ：インテリジェントデバイス
製作者：？？？（転移したときに削除されてしまった）
管制人格：男性型
使用可能術式：ミッド式（に近いもの）
剣也たちの世界とは別の魔法の世界から飛ばされてきたインテリジェントデバイス。
転移したときに製作者やその世界のことなどが飛ばされてしまったため、出身世界はいまだに不明。
性格は結構明るく、少ししぶい一面を持つ。弓弦のことを「相棒」と呼び、それに合わせて弓弦も「相棒」と呼んでいる。
待機形態は、銀色のプレートにチェーンを通し、それに『Φ』の字が刻まれたようなもの。
戦闘の時は、腰のベルトにプレートだけが付いている。

スカイグラスパー：ストレージデバイス
管制人格：無
使用可能術式：飛行魔法、防御魔法、自身への魔力刃発生
空戦があまり得意ではない弓弦様に作ったデバイス。見た目はスケートボードで、黒色のボードに紺色の線が交差して入っている。待機形態はこの状態をそのまま小さくし、胸のあたりにバッチとしてついている。
飛行も可能だが、腕に装着して盾にしたり、魔力刃を形成して突撃しながら相手を切ることもできる。

光星菜：ＮＦＤ部隊員（通信係）　ＣＶ：田村ゆかりさん
年齢：１０歳（実際の年齢は不明。書類上この年齢。他のマテリアルも同じ）
魔力光：少し黒がかった桃色
血液型：Ａ型
魔力数値：Ｓ＋
魔導師ランク：Ｓ＋
元『星光の殲滅者』。剣也との戦いで敗北し、その後他のマテリアルとともに仲間（友達）になった。
オリジナルにしたのは高町なのは。それもあってか彼女の戦闘スタイルは砲撃・射撃型になっている。ただ近接戦闘もある程度はできるため、ただ動かないだけの的となることはあまりなかったりする。
性格は相当クール。自分から話すことはあまりないが、最近はよく話すようになり、時折笑顔も見せるようになった。
マテリアルの中では保護者的な立場で、時々はっちゃけたりする他のマテリアル二人をうまく抑えている。
自分を助けてくれた剣也には、ちょっと特別な思いがあったりなかったり。
容姿は茶色の髪をショートにし、青色の眼をしている。（ゲームと

は少し違い、なのはたちと同じようなハイライトがはいっています。
他のマテリアルも同じ）
バリアジャケットは高町なのはのジャケットを真逆にしたような色。
しかし防御力が少し下がり、機動力が上がっている。
時折見せるその優しさと、その輝くような魔力光から『星光の守護者』とも呼ばれている。

ルシフェリオン：ストレージデバイス
製作者：？？？（夜天の書から生まれたため遠まわしに言えばウィーグル・アルトリア。他のマテリアルも同じ）
管制人格：女性型（但し意思はない）
使用可能術式：ミッド式＆古代ベルカ（少し）
レイジングハートを紫色にしたようなデバイス。ストレージデバイスのため意思は持たず、ただの武器として使用している。
待機形態は紫色のビー玉の様なもの。戦闘時はレイジングハートの赤い玉を紫色にし、金色の部分を赤紫色にしたようなもの。
３つのモードに変化することができ（ヒートヘッド・ブラストヘッド・ディザスターヘッド）、使い分けることで砲撃・射撃に攻撃方法を変化できる。
剣也からは、「インテリジェントの方が、意思の疎通とかできて戦闘向きじゃないか？」と言われていたりするので、この後変える予定もあったりなかったり。

剣千早：ＮＦＤ部隊員（書類整理）　　ＣＶ：水樹奈々さん
年齢：１０歳（実際の年齢は不明。書類上この年齢。他のマテリアルも同じ）
魔力光：
血液型：Ｏ型
魔力数値：Ｓ－
魔導師ランク：Ｓ

元『雷刃の襲撃者』。弓弦との戦いに敗れ、星菜と同じように仲間（友達）になった。
底抜けに明るく、たいてい笑顔。常に本を読んだりインターネットをしたりして、新しい情報を吸収している。何気に頭がよく、大体すずかと同じくらい。
マテリアルの中では末っ子的存在で、結構な甘えん坊。
オリジナルはフェイト・テスタロッサ。彼女よりもよくしゃべる。
（記憶もある程度あるため、フェイトがクローンということも知っている。ただ自分からそれを剣也や弓弦に言ったりする気持ちは全くない）
弓弦には少し憧れたりしている。彼との連携は素晴らしいものもある。
容姿はフェイトの髪の色を水色にし、先端を黒く染めたような感じ。
目の色は赤。
バリアジャケットはフェイトのジャケットのベルトを青くし、スカートを水色にしたようなもの。
超高速機動を利用した近接戦闘を得意とし、通常形態ではＮＦＤ最速のスピードを誇る。
砲撃も大体はできるので、不意打ちや決め技などに使う時もある。
その高速戦闘と、変換気質の『雷』から『迅速の雷光』とも呼ばれている。

バルフィニカス：ストレージ→インテリジェントデバイス
製作者：？？？（夜天の書から生まれたため遠まわしに言えばウィーグル・アルトリア。他のマテリアルも同じ）
管制人格：男性型
使用可能術式：ミッド式＆古代ベルカ（少し）
元はストレージデバイスだったが、千早の頼みでマリエル技官にインテリジェントデバイスにしてもらったデバイス。
性格は妹を見守る兄の様な感じで、おっちょこちょいな千早を常に

心配している。
待機形態はバルディッシュを水色に染めたような感じ。戦闘時も中央の宝玉を水色に染めたようなもの。
普段よりもさらにスピードを上げる「スプライトフォーム」への変換機構を内蔵している。
この状態ならば機動力は格段に上昇するが、その分防御力はがた落ち。ちょっとした一撃が致命傷になることもあり得る。

十六夜美妃：ＮＦＤ部隊員（デバイス管理）　　ＣＶ：植田佳奈さん
年齢：１０歳（実際の年齢は不明。書類上この年齢。他のマテリアルも同じ）
魔力光：黒がかった紫色
血液型：ＡＢ型
魔力数値：ＳＳ＋
魔導師ランク：Ｓ
元『闇統べる王』。剣也＆リインフォースに敗北し、ほかの二人と同じように仲間（友達）になった。
性格は結構な高飛車。たいてい人をいつも見下したような態度をとるが、友達やその家族に対してはそんな態度をとらなくなった。
マテリアルの中ではリーダー的存在。しかし時々はっちゃけ多様な感じになるので、うまく星菜がサポートをしたりしている。
オリジナルは八神はやて。容姿は緑色の目にベージュが少し灰色がかったような髪。
戦術もあまり変わらないが、デバイスを槍の様に使った近接戦闘もこなす。
剣也を『命の恩人』としてみており、自分の一番大切な人と感じている。（まだ恋愛感情には発展していない）
ＮＦＤでは剣也に次ぐ魔力量を誇るため、その魔力を利用した広域殲滅魔法を得意とする。

その夕闇の様な魔力光と、その殲滅力から『夕闇の王』とも呼ばれている。

エルシニアクロイツ／宵闇の書：ストレージデバイス
製作者：？？？（夜天の書から生まれたため遠まわしに言えばウィーグル・アルトリア。他のマテリアルも同じ）
管制人格：男性型（但し意思はない）
使用可能術式：古代ベルカ
シュベルトクロイツを紫色にしたような杖。待機形態も同様。宵闇の書は夜天の書を美妃用に調整したもの。
エルシニアクロイツは詠唱用のサポートとして使われることが多いが、近接戦闘時の槍として使うこともある。
宵闇の書は発動に時間がかかる魔法のサポートに使われる。（管制人格はなし）
特にインテリジェントにする予定もないので、そのまま使う予定。

NFDメンバー&デバイス紹介（後書き）

ポッキー「つ、疲れた・・・」
剣也「お疲れさん」
ポッキー「まあ追加要素と言うのは、剣也の「不知火」、弓弦の「スカイグラスパー」、千早のバルフィニカスをインテリジェントデバイスにしたということですね。
剣也「ついにガンダムまで入ったか」
ポッキー「かっこいい名前が思いつかなかったんです・・・すみません」
剣也「まあいいけど。次回は？」
ポッキー「任務発表ですね。まだ戦闘はないです」
剣也「お楽しみに～」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：部隊としての一面と学生としての一面（前書き）

本編スタートです。まだ戦闘描写はないですね。
最後の方に、ちょこっとだけ新キャラクターが出てきます。
それでは、本編をどうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：部隊としての一面と学生としての一面

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：部隊としての一面と学生としての一面

「さてと・・・みんなそろったな」

五年生になって、２週間ほどたったある日、俺たちの元に一つの指令が来た。

今俺たちは、部隊員全員でその任務についてミーティングをしていた。

「千早、内容を」

「はいは～い」

話し合いの場は、俺の家の地下室。余っている一番大きな部屋は、今ＮＦＤの会議室兼作業場になっている。

「今回の任務は、ＮＦＤにとって初めての管理外世界での任務。内容としては、そこにのみ生息する生物の生態調査」

「その世界について、何か情報はあるんですか？」

「あるよ。世界名は『フェンリル』。緑がたくさんあって、たくさんの生物がすんでいるって。一応ところどころに街はあって、生活するのには困らない」

「ほう…ちなみに、その現地にしかいない生物の名称はあるのか？」

「ちょっと待ってね・・・あった。名称は『アラガミ』・・・たくさんの個体がいて、いろいろなところにすんでいるって。こちらから何もしなければ、相手も何もしてこないし、人になつく個体もいるらしいけど」

「それだけ調べられているなら、もう大丈夫な気はするけどな」

「より詳しくってことだろ。というかなんでそれだけ調べられていて管理世界じゃないんだ？」

「その生物の管理が厄介なのでしょう。なるべくは面倒事を減らしたいでしょうし」

「確かにな」

書類を確認し、作戦日時を確かめる。一週間後の土・日・・・って短いな！
「二日で調べ上げられるか！？」
「その点は大丈夫。その世界とこちらの世界の時差は、驚くことに7日。つまり二週間かけて調べられる」
「さすが別の世界・・・」
とにかく、時間には困らないっぽいな。移動手段は・・・アースラか。
俺たち専用の次元航行艦がほしいところだが・・・この年ではもたせてくれないだろう。
せめて２０歳近くにならないとな。後免許とかもありそうだ。

「ほえ～、お疲れ様だね」
「体、大丈夫？」
「まあ、伊達に鍛えてないし」
「俺も同じく」
「でも、星菜ちゃんとか千早ちゃんとか、美妃ちゃんとか大丈夫なん？」
「私をなめないでください」
「いつもしっかり運動して、よく食べて、寝てるから大丈夫！」
「まだひよっこの貴様とは違うのだ」
「う・・・そこまで言われると傷つく」
作戦の前日の学校。昼休みなのでみんなで弁当を食べていた。
「万が一のことがあったら、言いなさいよ？」
「わかってるよ」
「いい病院なら、いくつか知ってるから・・・」
アリサとすずかが心配するように言ってくる。魔法を使えない側から俺たちを見れば、危険なことに足を突っ込み続けているようにしか見えないからな。
「バニングス、月村、友達を心配するのもいいが、自分の体も考え

ろよ？あの時は俺たちが二人とも偶然いて、見つけたからよかったものの・・・」
「ああ、去年のことか」
去年の・・・９月くらいだったか？俺と弓弦が買い物中に偶然会って、話していたら目の前で二人が誘拐されて、即座にサーチャーくっつけて追いかけたんだった。
「あの時に不知火を持ってなかったら、正直きつかったな」
「まあな。周りに鉄棒とかがあったが、やっぱり剣の方が使いやすい」
「あの時の二人、ちょっと怖かったわよ・・・」
「なにか、別人の様な感じだった」
「友達が命の危険にさらされたんだから、当然のことだろ？な、弓弦」
「そう言うことだ。俺たちは平気だから、二人は自分のことを考えといてくれ」
「・・・あんたたちがそう言うなら、仕方ないわね」
「でも、気をつけてね？」
「「当然だ」」

「君たちも、頑張るな」
「そう言うクロノも、最近は忙しいんじゃないのか？」
「確かに最近はいろいろあったが・・・君たちほどじゃない」
「そっか」
そんでもって当日、俺たちはフェンリルに向かうためアースラに乗せてもらい、移動していた。
クロノももう１６。ミッドチルダではあと二年すれば成人らしいのだが・・・
「で、彼女とか見つかったの？」
「そんなことにうつつを抜かしている暇なんて無いさ。最近は勉強も忙しいからな」

「お疲れさん」
クロノとは同じ男と言うことで、年上だが敬語を使って話すことはない。
魔法使いの先輩と言うことで、経緯はあるがあちらが「そこまでされるとむしろこっちが気を使う」ということでこうなった。
「剣也君、あと１０分くらいでつくよ～」
「りょーかい」
ネクサスの調子の確認のために、整備室に向かった。
マイスターまでとはいかなくても、簡単な整備くらいなできるからな。
まあ、美妃には到底かなわなそうな気がするんだけど・・・

「ふう・・・」
剣也たちが向かっているそのフェンリルの都市部・・・から結構離れた森の中。
一人の少年が、ファイル片手にとことこと歩いていた。
「うん、今日も異常なしっと」
近くの岩に腰掛け、一息ついた。
（「ヨミ、そっちの方はどうかな？」）
（「特に変わったことはなし。平和そのものよ」）
（「そっか。ありがとう」）
ヨミと呼ばれた誰かと念話を終えると、背負っていたリュックから水筒を取り出す。
コップに中身を注ぎ、一口飲んだ。
「確か、今度観光に来る団体さんが来るんだったっけ」
手帳を取り出し、予定表を見た。
「安心して見れるように、頑張らなくちゃ」
その顔には、幼いながらも確かな意思が瞳に宿っていた。
（「最近は変なことが多いからね・・・注意しないと、何が来るかわかったもんじゃない」）

その右手には、オオカミのような金属の装飾がついた黒い手袋が付けられていた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１：部隊としての一面と学生としての一面（後書き）

いやー、やっぱり読者様は素晴らしいと思う。
剣也「何故に？」
昨日の活動報告でも書いたんだけど、ついにユニーク数が一万件を突破して、それを見た瞬間にふとね。感想とかは少ないけど、見てくれている人がちゃんといてくれる、って言うのはうれしいし。
剣也「なるほどね」
これを糧に、この作品も頑張っていきます！
剣也「で、次回は？」
新キャラクター登場の回ですね。今回でもありましたが、この作品にとあるゲームの物・生物・人を出します。わかる人はわかるでしょうね。
剣也「次回もお楽しみに～。コーナーの名前も募集してまーす！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ２：マキナ・ユークリウッド（前書き）

第二話です。新キャラクター登場のお話。
ほのぼのとした感じです。書いてても落ち着いて書くことができました。
では、本編をどうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２：マキナ・ユークリウッド

Ｅｐｉｓｏｄｅ２：マキナ・ユークリウッド
「到着、だな」
「ふ～、ずっと外の空気を吸えないってのは、結構こたえる」
次元港、と呼ばれる空港みたいなところに着き、背伸びをした。
「日程は？」
「これからその区域のスペシャリストにあって、話を聞くことになってる」
「よく了承が取れたもんだ」
「表向きは観光、ってことにしてるから」
「さいで」
「ちなみに、その方の名前は？」
「ちょっと待ってね・・・あった、『マキナ・ユークリウッド』っていう人だって」

「よし、準備完了！後は来るのを待つだけだ」
地図やらライトやら緊急用のライトなどを準備し終えて、準備が終わったことを確認した。
人数は五人・・・そこまで多くもないから、落ち着いて対応はできる。
「大丈夫、マキナ？」
「大丈夫だよ、ヨミ。いつも通りやれば平気さ」
やってきたのは、頭に輪っかがつき、体は近未来のスーツみたいな模様が体中に走っている少女、名を『ツクヨミ』。僕の友達であり、相棒の様な存在だ。
ヨミ、というのはあだ名みたいなものだ。
「そう・・・念のために、『帝王』と『炎帝』の方には注意を入れておいたわ。いざという時は・・・ね」

「覚えておくよ」
それから１０分ほどたって、小屋をノックする音が聞こえた。
「ヨミ、フードを」
「うん」
この体を見せるとたいてい驚かれるので、ヨミには僕と会う時以外はフードをかぶってもらっている。かぶったのを確認すると、ドアを開けた。
「はーい！」
ドアを開けると、１０歳ほどの５人の男女が集まっていた。
「すみません、今日予約を入れていた剣と言うんですけど」
「ああ！剣千早さんですね。初めまして、ここの案内人の『マキナ・ユークリウッド』です」
いつも通りのあいさつを終え、中に入ってもらった。
「今日は観光、ということを聞いたのですが、それで大丈夫でしょうか？」
「はい。みんなのそのつもりですから」
「ずいぶんとお若いですね・・・何歳なんですか？」
「１０歳です。びっくりしました？」
「ええ。自分も同い年ですし、そんな年で接客業なんて・・・すごいですね」
ちょっと長い黒髪の男の子が驚いていた。
「その、隣にいるフードをかぶった方は？」
「アシスタントの子なんですが・・・太陽の光がちょっと苦手なんで、こうしてもらっているんです」
「こんにちは、ヨミと言います」
頭を下げると、それに合わせるように茶色のショートカットの子が頭を下げた。
フードの理由はたいていこうしている。実際ちょっと苦手だったりするのだ。
「話はここまでにして、今日の予定を申し上げたいのですが…よろ

しいですか？」
「はい、お願いします」
それから、回るルートと注意事項などを話し、小屋を出た。

「うわ・・・」
「きれいですね・・・」
視覚を共有してみた世界は、自分がいた世界の自然とは別次元のものだった。
色とりどりの花がところどころに咲き乱れ、空気も森そのものを感じているように思えるし、深呼吸をすれば体全体がいやされるような感覚に襲われる。
「観光に来る人たちは、たいていみんな笑顔でここを通って行くんですよ。おまけに動物もあまりいないので、写真を撮ったりするのにはぴったりなんです」
「確かに、それは納得だな」
弓弦が写真を撮りながらそう言った。あいつ、こういうところ大好きだもんな。
「先ほど言いましたが、ここを通り過ぎれば写真、電子機器の使用は禁止となりますが、大丈夫ですか？」
「はい。まあろくにもってきてもいないんですが」
「なんでですか？」
「一応・・・これがあるので」
千早がバルフィニカスを見せた。それを見て、マキナさんが驚く。
「なるほど、デバイスですか。自分も持ってるんですよ」
そう言うと、右手にはめていた手袋を見せた。甲の方には、オオカミのような金属の装飾がついている。
「『白蓮』って言うんです。インテリジェントなんですよ」
〜お初にお目にかかる。我の名は『白蓮』よろしく頼む〜
〜バルフィニカスだ。こちらこそよろしく〜
〜ネクサスです。この世界にははじめてきたので、案内はお願いし

ます〕
〔ファイだ。今回は相棒と友達が世話になる〕
「アインスです。マキナ殿、白蓮殿、よろしくお願いします」
「あれ、一つだけ別の感じがしましたが」
「ええ。ちょっと変わってて、一つのデバイスに二つ人格が入ってるので、そのせいかと」
「へえ～、珍しいですね」
あちらは別に気にしていないようだ。よかった・・・ユニゾンデバイスなんて今じゃほとんど見かけないし、こういわないと大変なことになるからな。
『ロストロギア『闇の書』の管制人格を体に入れている』なんてことが知られたら、俺は今頃世界中を逃げ回っていることだろう。
「じゃあ、先に行きましょうか」

「（ヨミ、大丈夫？）」
「（ええ。今日はそこまで日光は強くもないし、外してもいいくらいかな。でも、お客さんがいるからね）」
「（ごめんね、我慢させちゃって）」
「（平気。今までもあったことだし）」
隣を歩くヨミに念話を飛ばす。予定がなければ、今日は二人で森を散歩にでも、と思っていたのだが・・・まあ仕方がない。
「（白蓮、周りの生体反応は？）」
〔（大きいのはないな。いてもコンゴウかシユウくらいだろう）〕
「（それなら大丈夫だね。オウガ系統はどう？）」
〔（ノーマルが3、炎が2、雷が1だ。いずれもマキナの使役獣だな）〕
「（ありがとう）」
今歩いているところは、木が多く、薄暗くてはじめてきた人には少し不気味に感じるところ。
ここからはちょっと危険なので、電子機器の使用は抑えてもらって

いる。
「あの、あの狼みたいなのは？」
「あれは『オウガテイル』って言う、この世界にすんでいる『アラガミ』の一種です。見た目はあんなですが、人懐っこいんですよ？」
「へえ・・・」
とは言っているが、個体にも違いはあるので凶暴な奴もいたりする。だからこその電子機器の使用の禁止だったりする。カメラのフラッシュが威嚇行為に見えることもあったりするからだ。
「そうですね・・・触ってみます？」
「いいんですか？」
「ええ。あの三体は、ちょうど自分が使役してるものなので」
魔法陣を展開して、近くに召喚した。
「召喚魔導師なんですか？」
「はい。まあアラガミを使役できているのは、今のところ自分だけなんですが」
「それはまた・・・だからこそ、この観光のスペシャリストなんですね」
「スペシャリストだなんて・・・いいすぎですよ」
オウガの頭を撫でつつ、そう答えた。見た目は鬼の様な顔を持ち、始めてみた人はたいていびっくりする。しかしこの人たちはそんなことがなかった。
「柔らかいですね・・・羽毛みたい」
「たいていの人はそう答えますよ。昔はこの毛を服に使っていたみたいですが、数の減少につながるということで最近はやっていないんですよ」
今ではすべてのアラガミの狩猟は禁止されている。時々密猟者が出るので、ヨミと対処に当たることもある。だけど今は・・・
「・・・」
「どうかしました？」
さっきの髪の長い男の子がきいてきた。顔でばれたのかな？

「いえ、少し考えごとです」
「観光者の減少とか？」
「まあ、それもあるんですが・・・それ以外のことです」
「相談に乗りましょうか？」
「・・・いい話じゃないですよ？」
それから、僕は最近この森で起こっていることを話した…

Ｅｐｉｓｏｄｅ２：マキナ・ユークリウッド（後書き）

剣也「感想が一件も来ないそうで」
ポッキー「まあ、予想はしていたけどね。自分でもいい作品をかけているとはあまり思えないし、最近では前作のお気に入り登録数とポイント数が少しずつ減っているからね」
剣也「悲しいな」
ポッキー「気にしたら前に進めない。とにかく今はこの作品を完結させることが重要だ」
剣也「頑張れ。で、次回は？」
ポッキー「戦闘描写がちょこっとだけはいるお話です。未だにうまく書けませんが・・・」
剣也「次回もお楽しみに。コーナーの名前も募集しています」

Ｅｐｉｓｏｄｅ３：女言葉って、使うの難しいんだよね・・・（前書き）

この物語での初戦闘のお話。特に激しい戦闘ではありませんし、短いです。
そして、マキナも戦闘をします。果たしてその実力は？
では、本編をどうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３：女言葉って、使うの難しいんだよね・・・

Ｅｐｉｓｏｄｅ３：女言葉って、使うの難しいんだよね・・・
「最近、少しずつですが小型のアラガミが減少しているんです」
「それは、先ほどのオウガテイルとか？」
「それ以外にも、飛行型の『サイゴート』、住処がほとんど変わらない『コクーンメイデン』って言うのがいるんですが、それも少しずつ減っているんです」
話していくにつれ、マキナさんの体は少しずつ青くなっていった。
「密猟、ってわけじゃないんですか？」
「そう言うわけじゃないんです。自分のレアスキル・・・『心通話』。これで、すべてのアラガミ、いや、すべての生物と念話をすることができるんです」
「便利と言えば、便利なスキルですね。生態調査とかにはぴったりの」
「ですね。それを使って、同種のアラガミに話を聞いているんですが、誰も知らないみたいで・・・まるで、『神隠し』にでもあったかのようだ、と」
「それはまた・・・小型のアラガミなら、触れあうのも楽でしょうけど・・・」
「大型となると、難しいんです。自分の使役しているものならまだしも、野生なら・・・ね」
「苦労しているんですね」
「最近はいつもそうですね。ヨミともいろいろ話し合ってはいるんですが」
「お疲れ様です」
「いえ、こっちも話せてすっきりしました。剣也さん、でしたっけ。ありがとうございます」
「どういたしまして」

それから俺たちは世間話をしつつ、先に進んでいった。

「（うん・・・ここら辺で、昨日反応が消えたんだっけ）」
「（そうね。消えたのはサイゴート3体・・・発信器の反応も消えてる）」
森の中ほどで、少し休憩中。開けているので、いざという時にも対応はできる。
「・・・」
「どうかしたんですか？弓弦さん」
「・・・来る！みんな伏せろ！」
「へ？」
その瞬間、頭の上あたりを一つの魔力弾が通り過ぎた。
「ッ、皆さん！下がっていてください！」
「そう言うわけにもいかないでしょ！？」
剣也さんと弓弦さんがデバイスを取り出した。
「一人よりも三人の方が、対応力は上がる・・・そうだろ？」
「助け合うってのは、生きていく上で大切だからね」
「・・・すみません、お願いします」
白蓮に左手を乗せ、構える。
「行くよ、白蓮！」
〜承知！〜
「決めるぞ、相棒」
〜オッケー！〜
「いけるな？ネクサス」
〜いつでもどうぞ！〜
『セット・アップ！』

「まさか、こんな事態になるとはね・・・」
「我慢しろ『結』。予測は密猟者の話の時点でできてただろ？」
「そうだけど・・・なるべくは、穏便にいきたかったから」

いつものジャケットに着替え、手を開いたり閉じたりして調子をチェック。
さて、なぜいま私が『結』と呼ばれたのか。これは、とある星菜の言葉から。
『女性の時は、剣也と呼ぶのを控えたいんですが』
とのこと。これから母さんが新しい名前を考えることになり、ネクサスの「光りを紡ぐ」からこんな名前に。そしてついでに女言葉にするようにもなった。
今ではもう慣れたものだが、最初のころは恥ずかしくて顔から火が出るかと思ったほど。
「え、ええっ！？」
「あー、ごめん。私のデバイス、セットアップするとこうなるんだ」
「ま、始めてみた人はこうなるわな」
「び、びっくりしました」
「仕方ないよ。じゃ、『不知火』、シングルモード」
〜ｓｉｎｇｌｅ　ｍｏｄｅ〜
つけていた指輪が光り、右手に一振りの日本刀が現れる。うん、自分用にオーダーメイドして作ったものだから、手にしっかりなじむ。
「俺が『グラスパー』で先行する。後ろからついてきてくれ」
「わかった」
「僕も行きます。少し待ってくれませんか？」
「いいけど」
「すみません。じゃあ・・・『炎まといし歴戦の将よ、今我の前にその姿を現わせ・・・いでよ、炎帝ハンニバルっ！』」
すると、白い魔法陣の周りに少し炎が現れ・・・そして、白を基調とし、炎をまとった竜が現れた。
「グルル・・・（本当に出ることになるとはな、マキナ）」
「ごめんね、ハンニバル。なるべくは、出さないことを祈っていたんだけど・・・」
なるほど、あれが『心通話』の性能ってわけね。

「これならスピードは大丈夫です。二人くらいなら余裕ですけど・・・結さん、ですよね？乗りますか？」
「そうね・・・じゃあ、お言葉に甘えて」
「俺は、こっちだな」
すると、弓弦の足元にスケートボードの様なものが現れる。これが弓弦様の飛行用ストレージデバイス『スカイグラスパー』。自身の魔力を加えることで、飛行魔法を発動することができる。
「ヨミ、三人を小屋に案内してくれ」
「わかったわ」
「（二人とも、気をつけてください。いざという時は、連絡さえしてくれればすぐにでも）」
「「（わかった）」」
そして、私たち三人は森の奥へと向かった。

〈敵さんの反応は約２０・・・魔力反応はその半数だな。あとは質量兵器組だろう〉
「サンキュ、相棒」
グラスパーを駆り、敵に近付いていく。後ろにはハンニバルに乗った結とマキナ。
正直、俺はいらないのでは・・・？あの巨体から見るに、火力は申し分ないだろうし、魔力量も高町より高い。確かにあれなら『炎帝』と呼ばれる理由もわかる。
「私が軽く射撃で威嚇してみる。相手の反応を見て、行動しよう。マキナ、ハンニバルの火力調整、お願いね」
「わかりました」
「さん」付けはこんな状況で使ってるわけにもいかないので、もう呼び捨てである。俺たちはそうしているが、マキナは「さん」付けのままだ。
「フェザーバレット・・・ファイア」
白金の魔力弾が敵に向かうと、驚くことに普通に敵に当たった。

「どうやら、あまり交戦経験がないっぽいな。これなら楽に行けるだろう」
「各自散開して、敵の無力化・・・いいね？」
「了解です！」
大体一人当たり6～7人。よし・・・
「水無月弓弦、敵の無力化を開始する！」
グラスパーで一気に敵に近付き、セイバーをふるう。
「なっ・・・ぐあああっ！」
「気づくのが遅い」
不意打ちに対処できず、普通にそこら辺にいた6人を峰打ちで撃破。
うーむ、ここまで行くと楽すぎるような・・・
「ゴアアアアアッ！」
あっちではハンニバルが炎の槍みたいので蹴散らしてるし・・・
「はあああああっ！」
結も不知火で敵を無力化してるし。あっという間に終わった。
ふと、離れたところに目を向けると一人男が立っていた。
白衣をまとい、ひげを生やし、不気味な笑いを浮かべている男が。
「（事情を・・・きかせてもらおうか！）」
そう思い、グラスパーで一気に近づいたと思ったのだが・・・
正面に立ったと思った瞬間に、そこにいなかったかのように消えてしまった。
「？どうしたの、弓弦」
「いや、そこに人がいたと思ったんだがな・・・」
「グルル・・・（私もそれは感じたが、はっきりととらえることはできなかったな）」
「とにかく今はこの人たちをどうにかしましょう」
それから俺たちは、マキナが出したほかのアラガミ（『シユウ』というらしい）に手を貸してもらい、地元の警察の様な人たちに引き渡した。
その時に、一応証明書代わりとしてＮＦＤの物を見せたのだが・・・

普通に通った。
管理外世界だから、少し心配していたんだけどな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３：女言葉って、使うの難しいんだよね・・・（後書き）

今回は、私だけで後書きを。
今回書いていて、少し『大丈夫かな・・・？』と思ったところが一つ。
”管理外世界で、管理局の権限は通用するのか”
前作でも、剣也君が「なら、こっちの法ってものにしたがってもらわなければ、話が通らない」と言っていました。
こう書いて、あとで考えてみればやっていることが矛盾している気も。
まあ、そこの法を守って、しっかりやれば大丈夫なのでしょうかね。
「郷に入っては郷に従え」
ということわざもあるくらいですし。
これについて、何か意見のある方は、メッセージ、または感想の方に書いていただけるとうれしいです。

マキナ・ユークリウッド&フェンリルの設定（前書き）

今回は新キャラクター、マキナ君と住んでいる世界であるフェンリルの設定です。

９／７：一部訂正

マキナ・ユークリウッド&フェンリルの設定

マキナ・ユークリウッド　ＣＶ：井口裕香さん
性別：男
血液型：Ａ型
年齢：１０歳
魔力光：白
魔力数値：ＡＡＡ＋

管理外世界「フェンリル」で、観光業を行っている少年。レアスキル『心通話』で、原生生物の『アラガミ』と意思を通じ合わせることができる。
髪は紫色のショートカット。目は翡翠色。
何にでも優しく、怪我をしている生物や人を見るとすぐに治療する優しい心の持ち主。
生き物の命を粗末にする人が大嫌いで、そういった人を見たときは少し口調が変わる。
父親は物心つく前に行方不明。母親は一年前に病気で他界した。
デバイスの『白蓮』は、母親から譲り受けたものであり、名前は変えず、バリアジャケットだけを変えている。
パートナーである『ツクヨミ』とは、友達であり、頼れる相棒どうし、という認識である。

○レアスキル
・心通話：あらゆる生物と会話（念話）を行うことができる。これにより、しゃべれない生物の調子や状態などを聞くことができる。アラガミでしゃべることができないものと対話するときによく使用する。

家族設定

・リンドウ・ユークリウッド
マキナが物心つく前に行方不明になってしまった父親。
今も行方がわからず、マキナの知らないところでアラガミ達が捜索活動を行っていたりする。

・サクヤ・ユークリウッド
一年前に亡くなったマキナの母親。パートナーであったツクヨミに後を任せ、病気により他界（ガン）。
使っていたデバイスの白蓮は、亡くなる前にマキナに渡した。

・ミレーナ・ユークリウッド
マキナの姉。１５歳。マキナと同じレアスキルの『心通話』を使える人物。
マキナがアラガミ担当なのに対し、ミレーナはモンスターの担当者。（というか研究者だったり）
相棒は『ディアブロス亜種』（愛称：ディア）。装備は『ディアブロUシリーズ』。
結構破天荒な性格だが、弟思いの優しいお姉さん。
デバイスはマキナと同じく手袋型デバイスの『テンペスト』。性格は武士とは逆の騎士の様な性格。

その他の人物

・ツクヨミ（ヨミ）　ＣＶ：佐藤利奈さん
サクヤのパートナーであったアラガミ。現在はマキナのパートナー。
第一級禁忌アラガミだが、実際は結構優しい。
戦闘時は、巨大なレーザーや魔力弾を使用する。

・シオ　ＣＶ：福井裕佳梨さん

アラガミにしては珍しい、とてもよく人に似たアラガミ。
２世紀前の暴走事故をよく知っており、当時『ゴッドイーター』だった雨宮リンドウとの認識もある。
現在は内職の仕事をしながら、日々アラガミ達の健康チェックをしたりしている。
マキナやヨミとは結構仲がいい。

デバイス
白蓮：インテリジェントデバイス
製作者：榊シロウ
管制人格：男性型
使用可能術式：ミッド式
母親のサクヤ・ユークリウッドから受け継がれたブーストデバイス。
形は黒い手袋に竜の様な紋章（フェンリルのマーク）が刻まれたもの。戦闘時も変わらない。
以前は白いドレスのようなジャケットを出していたが、使用者がマキナになったことからスイーパーノワールというスーツの様なジャケットに変わった。
主に使用する魔法は補助魔法。高度な回復魔法や、捕縛魔法を駆使する。
召喚魔法が一番の得意技。使役したアラガミを召喚し、自分の手足のように扱うことができ、それによる多様な戦術を展開することも可能。
これにもう一つ、アラガミと精神を同調させることで『身神融合』という状態を発動させ、融合したアラガミと同じ技を使用でき、なおかつ身体能力も上がる。
性格は武士の様な性格で、まだ幼いマキナを結構心配している。

フェンリル

管理外世界であり、広大な自然を見に来る観光客が多い。
中でもマキナが管理するところは人気があり、予約しないとなかなか見ることはできないスポットが多い。（その分、危険が伴うこともあるが）
２世紀ほど前に、アラガミが原因不明の暴走を起こし、『ゴッドイーター』と呼ばれるアラガミの狩猟部隊が作られた。長い戦いのすえそれを食い止め、現在の様な状態が作られている。もともとアラガミは増える数が少ないため、現在では特別保護生物と認定され、狩猟などが禁止されている。（特別な場合を除く）

マキナ・ユークリウッド&フェンリルの設定（後書き）

今回はマキナ君に来てもらいました。
マキナ「こ、こんにちは～」
元は、君には妹がある設定でした。
マキナ「なんでいないの？」
キャラクターを大量に出すと後がきつい・・・というわけで、もとは剣術士だった君が召喚師になりました。
マキナ「へ～」
次回はこの前の後のお話。剣也たちは、どうするのか？そしてマキナは？
マキナ「お楽しみに～」

後書きのタイトル募集、今月末までに延長したいと思います（一件も来ていないので・・・）これぞ、というのがある方は、感想、またはメッセージの方にお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４：少年の信念（前書き）

何とか書き上げた・・・風邪が治ってから一気に書きました。
横になっている間、ちょっと考えたりしたのが役に立ちましたよ。
今回はこの前の後のお話。マキナが一つ、決心をするお話です。
では、本編をどうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４：少年の信念

Ｅｐｉｓｏｄｅ４：少年の信念

「密猟業者みたいだけど、これでよかったのか？」

「後で情報がこっちに来ると聞いたので、大丈夫だとは思いますけど」

ジャケットを解き、小屋に戻ってさっき戦った三人でお話し中。

ヨミも隣にいて、他の女性三人はすでに宿に向かったそうだ。

「でも、何か引っかかるんだよな・・・」

「ああ。やけに簡単に倒せたというか、ただの『おとり』みたいだったというか」

「ハンニバルも、「いつもの業者ならもうちょっと歯ごたえがある」とはいってました」

それは自分でも感じていた。もう少し抵抗があってもいはずなのだが、今回はほとんどなく、こちらの独壇場だった。まあいつもはハンニバルは出さないんだけど、準備させておいたのだからしょうがない。

「剣也、こんな状況なら・・・」

「ああ。もう黙っている場合じゃないだろう」

「？」

いきなりどうしたんだろうか。二人の顔つきが真剣なものに変わる。

「俺たちは〈管理局三提督直属特別遊撃部隊『ＮＦＤ』の隊長と副隊長なんだ。さっきの女の子三人も部隊員だ〉

「え・・・？」

嘘だと思った。僕と同じくらいの人たち（戦闘力はずば抜けていたが）管理局員だなんて・・・

「嘘だと思うなら、これがある」

二人のデバイスから、証明書らしきものがホログラフィックで現れる。さっき警察の人に業者たちを引き渡した時も見せていた。その

時ははっきり見えなかったけど・・・
「本来の目的は、ここの生態調査だったんだ。みたところ、聞いた話以外は危険なことはないみたいだから、このままでいいかと思ったんだけど・・・」
「どうにも、引っかかる部分があってな。詳しい情報が来ればいいんだが」
「そうですか・・・」
何とも言えない緊張感が、その場を覆っていた。すぐにでもこの空間を出たいと思うのだが、足が動かない。
「俺たちの方でもいろいろとあたってみる。役に立つ情報があれば、そちらに送りたい。連絡先、教えてくれるか？」
「わかりました。白蓮、デバイスに送ってあげて」
〔御意〕
データを飛ばし、そして二人の連絡先も教えてもらう。
「後二週間くらいはいると思う。そのうちにできるだけことを終わらせたいな」
「はい。自分も、ここのアラガミ達に不安を持たせたくないですから」
こうして、観光は半ば険悪なムードの中終わった。

「どうでしたか？」
「まだ情報がないからな・・・もうそろそろで来るとは思うんだが」
「詳しいのは、牢屋の中にいる人にでも聞けばどうにかなるかもしれない」
「そうですか」
宿に戻り、大きな部屋（宴会室）があったのでそこを貸してもらって会議中。
すでにご飯を食べ、風呂にも入った。
「敵の手ごたえが、ほとんどと言っていいほどない、か…」
「確かに、怪しいね」

美妃と千早がいった。確かにあの手ごたえのなさは異常だった。まるで、『別の何かを隠すおとり』のような・・・
〜お、連絡が来ましたよ。相手は・・・先ほどの管理局の方々からですね〜
［内容は・・・っ！？］
「どうした、アインス？」
［捕まえていた軍団が、全員、原因不明の死を遂げていると・・・］
『っ！？』
なん・・・だと？それじゃ、ほとんどと言っていいほど手掛かりがない。
［しかし、ほんの少しだけ話を聞けたそうです。あの人たちは何者かに雇われているようで、その名前を聞いたときに、いきなり・・・魂が抜けたかのように、パタリと・・・］
「そうか・・・」
その雇っていた人物が、今回の黒幕ってわけか。
「相棒、さっき戦った映像データ、残ってるか？」
〜ああ。ちょっと待ってくれよ・・・これだ〜
視覚を共有して、その映像を見る。敵を倒し終わって、確認を終えた後・・・？何か人が写っている。
「こいつだな。怪しいと思って接近したんだが、霞の様に消えてしまった」
「何らかの幻術を使っている可能性がある、ってことですね」
「この人についての情報を集めたいな・・・できるか？」
〜できるにしても明日からの方がいいな。相棒も隊長さんも疲れてるだろ？〜
［体調を万全にしてからの方が、作業効率はいいですからね］
それもそうか、と思ったので、この日は軽くイメージトレーニングをして寝た。

「月がきれいねー、マキナ」

「そうだね、ヨミ」
夜空に浮かぶ満月を見ながら、二人でお茶を飲む。
ヨミも今はフードをはずしている。自分の方からしてみれば、こっちの方がかわいいというか、なんというか・・・
「どうしたの？」
「う、ううん！なんでもないよ」
「？」
ふと、今日あったことを思い出す。せっかく来てくれたお客さんなのに、中途半端なところで帰らせちゃったなぁ・・・今度連絡して、大丈夫な時にもう一度来てもらおう。
もちろん代金はなしで。
「最近、あの人と会わないのよね」
「ああ…シオさんのこと？連絡とかはないの？」
「ううん。前はちょこちょこ森の方であってはいて、話を聞いていたりはしたんだけど」
シオさん、僕の友達であり、アラガミである。しかし、最初見たときはアラガミとは思えなかった。
ヨミよりも人間らしいその体。だいだい色の目に、白い髪。雪の様な素肌。
人間らしい服を着ていて、ちゃんと話す。僕よりも長生きしているようで、少し前まではお世話になったこともあった。
「大丈夫かな・・・最近はいろいろあるから」
「あの人なら大丈夫よ！そんな簡単に負けることもないし」
「そうだね」
ずず・・・とお茶を一口。そして、ぽつりと、独り言の様に話した。
「僕は、ちゃんと人の役に立てているのかなぁ・・・？」
「マキナ？」
「こんな森の奥で、観光の仕事して、みんなたいてい笑顔で帰っていく。けれど・・・」
「けれど？」

「それは本当に、役に立っているのかな、って・・・」
「立っているにきまっているじゃない！そんな、考えることなんて・・・」
「アラガミ達にも、正直迷惑をかけているんじゃないか、って思う時もあるんだ。自分達が住んでいるところに、見知らぬ人を入らせるって」
「気にすることじゃないわよ！みんなだって、『マキナはいつも自分達のことを気にかけている。そんなことを気にはしない』って、いつも言ってくれてるんだよ？」
「そっか・・・」
月を見上げ、かみしめるように、こういった。
「ヨミ、僕の力は誰の役にも立たないかもしれない、けどね・・・」
「・・・？」
「いつか、誰かの役に立ちたい。そう思ってるんだ。誰もが笑顔でいられるような、そんなことをやり遂げて、みんなを、アラガミ達を、笑顔にって」
「・・・きっとできるわよ、マキナなら。きっと」
「ありがとう、ヨミ」
軽く手を握り合って、その後は二人で話した。
明日が、平和でみんな笑顔でありますように・・・って。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４：少年の信念（後書き）

「正直な話、今回はあまりよくない気がするんだよなぁ・・・」
弓弦「なんでだ？」
「なんか…感覚的にというか、本能というか」
弓弦「はあ・・・」
今度は、きちんとやります。自分もちゃんと自信が持てるようなお話を。
弓弦「頑張れ。で、次の話は？」
「休暇のお話。任務中で疲れたので、息抜きを・・・という感じで。以前『お出かけでもしたらどうでしょうか？』という感想をいただいたことがあるので、集団にはなりますがそれをやります。感想を下さった方、ありがとうございます（前作）」
弓弦「次回もお楽しみに」

Ｅｐｉｓｏｄｅ５：ちょっと息抜きに、ね？（前書き）

今回は普通のお話。任務中の息抜き、ということでＮＦＤ＆マキナで街でお出かけです。
やっぱりこういった話の方が、自分も書きやすいですね。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５：ちょっと息抜きに、ね？

Ｅｐｉｓｏｄｅ５：ちょっと息抜きに、ね？
あれから、３日ほどたったある日。
「ふうっ・・・！」
［つ、疲れました・・・］
〜さすがの私も、処理速度がきついです・・・！〜
「ゆ、指が・・・キーボードの叩きすぎで・・・っ！」
〜あれだけの情報量、処理するのがきついぜ・・・〜
隊長＆副隊長コンビ、そしてそのデバイス三機は・・・大量の情報整理に追われ、疲れ果てていた。
ちなみに、ほかの三人はというと・・・
『・・・』
同じく情報整理を行い、頭から煙を出して机に突っ伏していた。
「マキナからは、何か情報はあったのか・・・？」
「いろんなアラガミに聞いているらしいが、これと言って目だった情報はないそうだ・・・あっちもあっちで大変らしいぜ」
「さすがに、息抜きが必要な気がするよぉ〜」
「確かに・・・精神的にも、身体的にも結構きつい感じが」
「ここらで一息入れるのも、一種の手かもしれんな・・・」
全員が、同時に首を縦に振った。
と、いうわけで。
「マキナ、今日は町のガイドの方をよろしくお願いします」
「了解です！自分も、いろいろと整理をしたりして疲れていたので・・・」
急きょＮＦＤ＆マキナで、息抜きがてら街を探索することにしました。
「アインスも出たいときは言ってくれ。人気のない場所で入れ替わるから」

［覚えておきます、剣也］
マキナには、アインスのことはすでに伝えてある。俺たち以外に言わない、という約束で伝えた。最初教えたときは驚いていて、映像で見せたら少しの間気を失っていた。
「じゃあ、まずはウインドウショッピングでもしますか」
『はーい！』
ちょっとした、旅行気分だな。結構楽しいかも♪

「ここら辺は出店などが多いんで、買い食いにはもってこいなんですよ」
「おいしい～！」
「ったく、そんなに食ったら昼飯食えないぞ？」
「大丈夫だもーん」
千早さんが隣で焼き鳥を食べている。それの前にも、少し食べているんだけど…大丈夫かな？
「・・・」
「星菜？」
ふと、星菜さんが足を止めてある店を見ていた。
その店は、小さなアクセサリーショップ。その中の一つ、桃色の星型のペンダントをじっと見ていた。
「ほしいのか？」
「い、いえ。そういうわけでは・・・」
「正直に言えばいいのに・・・ごめん、ちょっと待っててくれ」
そう言うと、剣也さんが店に向かい、店主と話をして…そのペンダントを買ってきた。
「ほい」
「そ、そんな。悪いですよ」
「いいって。日ごろ頑張ってくれてるんだ。そのお礼さ」
「・・・ありがとうございます」
星菜さんはうつむきながらお礼を言って、少し顔を赤く染めながら、

そのペンダントを首にかけた。
「（全く、女心というものを少しは理解してほしいものだな）」
「（美妃さん？）」
「（いや、気にしないでくれ。ただのひとりごとの様なものだ）」
「（はあ・・・）」
まあ、仲がいいということで、流しておくことにしようかな。
〜（そう思っている主も、なかなかに鈍感だと思うぞ・・・）〜
そう、自分のデバイスが思っているとも知らず。

「なかなか、おいしかったな」
「デザートも、おいしかった！」
「もう、口の周りにクリーム付けて・・・こっち向いてください、千早」
子を見るお母さんの様に、星菜が千早の口元を拭いていた。同じ夜天の書から生まれた者同士だからなのか、三人は仲がいい。
〜俺もできることなら、食いたかったぜ・・・〜
「すみませんね、ファイ」
剣也はアインスと入れ替わりながらご飯を食べていた（先：剣也→後：アインス）。
メニューは取り揃えがよく、俺と剣也が肉中心のもの、アインスとマキナが野菜中心のもの、後の三人は魚中心のものを食べていた。
デザートはショートケーキがおいしいと言われており、女性陣は喜んで頼んだのだ。
まあ俺はコーヒーで済ませ、あとの二人はチョコレートケーキにしていた。
「会計は俺達がやるよ」
「そんな、自分のは自分で払います！」
〜この前の観光のお礼さ。後情報収集も兼ねてだ〜
「・・・じゃあ、お言葉に甘えて」
会計を済ませると時間を確認した。午後1時半をちょっとすぎたく

らいか・・・
「これからどうする？」
「そうですね・・・ん？」
なにかに気付いたようだった。
「あれは・・・！おーい、シオさーん！」
「シオ？」
その声に気付いたのか、一人の女性がこちらに小走りでやってきた。
「マキナ！久しぶりだね、元気してた？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ５：ちょっと息抜きに、ね？（後書き）

星菜「（剣也からプレゼント…ふふっ♪）」
「にやけてるなぁ・・・」
千早「恋する乙女、って感じだよね」
美妃「女の子らしいと言えばそうなのだが、あそこまで行くとな・・・」
「まあ、気にはしないでおこう」
千早「次回は？」
「引き続き、息抜きのお話です。最後に出たシオも入って、ちょっとした昔話もあったり」
美妃「次回をお楽しみにな？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ６：純白のアラガミ、推参（前書き）

更新がだいぶ遅れてしまいました・・・すみません。
最近は部活や勉強が忙しく、小説は毎日ちょこちょことしか進められませんでしたので・・・
では、お話をどうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６：純白のアラガミ、推参

Ｅｐｉｓｏｄｅ６：純白のアラガミ、推参

シオｓｉｄｅ

「それはこっちのセリフですよ。今まで何していたんですか？」

「特に何もないよ？普通にごはん食べたり、街に行って買い物したり」

相変わらず心配性だなぁ、マキナは。こっちは大丈夫なのに。

「マキナさん、こちらの方は？」

「シオさんです。僕の知り合いで、母さんの親友でもありました」

「初めまして。シオっていいます」

「こちらこそ初めまして。水無月弓弦と言います」

「リインフォースと言います」

「・・・本来の姿じゃないわね。もう片方はどこかな？」

〜（よくわかりましたね・・・本来はこっちです。御崎剣也、こっちが本当の名前ですよ）〜

その後、なぜこのような感じになっているのかを聞いた。

「（それはまた・・・苦労しているのね）」

〜（もう慣れました）〜

人目が多いということで、そのまま話を続けながら歩く。それにしても・・・

「多いわねぇ。こんな人数で何してたの？」

「観光ですよ。（本当は、仕事の息抜きですけど）」

「マキナが案内役ってことか。お疲れさん（マキナも情報収集の息抜き、ってとこか）」

「いえいえ、お世話になったお礼もあるので（相変わらず、シオさんの洞察力にはかないませんよ）」

少し歩いて、公園に着く。シートを広げられそうなところは・・・

あった。
「みんな立ちっぱなしでつらいでしょうから、少し休憩しましょう」
「助かります、シオさん」
バスケットから水筒を出して、みんなにお茶を出す。さて、私のことについても話さないとね・・・
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

剣也ｓｉｄｅ

「人も周りにいないようだし・・・剣也、戻ろうか」
〜ああ、そうだな〜
「〜モードアウト〜」
その言葉で、俺は元の状態に戻る。視覚の共有はしていないので、顔とかは見えない。
「じゃあ、剣也君が秘密を話してくれたことだし、私のことも話そうか」
「まあ、特に気にするようなことでもないと思いますが」
「私にとっては気にすることなの」
一体どういったことなんだろう・・・？
「おほん、じゃあ、私の秘密を言うね。実は私は・・・」
『・・・』
マキナ以外の俺たちが、ごくりと唾を飲んだ。
「こう見えて、『アラガミ』です」
『！？』
さっきアインスと入れ替わった時に見たから、姿は分かる。
あんな人間らしいアラガミがいるのか・・・？
「ま、びっくりするのは当然よね。現にサクヤやリンドウにあった時も驚かれたからねー」
「自分も初めて聞かされた時は驚きましたよ」
けらけらと笑いながら話す二人。おいてきぼりの俺達５人。

「髪型も最初は一本一本が太かったからね。時間かけてとかして、服もお下がりを貰ったりしてね。今はちょっとした内職とかがあるから、買い物とかで服も買えるし」
「はあ・・・」
一度視覚共有をしてみる。真っ白な髪に、雪の様な素肌。それに合わせるかのような白いワンピースと、帽子。言われなければ完全に人にしか見えないだろう。
魔力光は同じく真っ白。感情を見ていても魔力光が混じっているため少し薄い。
「マキナさんの両親と会う前は、一体何を？」
「そうねー・・・ヨミと一緒に山菜とったり、魚捕ったり、水浴びしたり。傷ついたアラガミを治したり・・・一番つらかったのは、2世紀前かな。たくさんのアラガミが無くなってね。仲間がいなくなるっていうのは、つらかった」
〜暴走原因も分からなかったと聞く・・・当時の『ゴッドイーター』たちにとっても、つらい戦いだっただろう〜
白蓮が合わせるように言う。
「それはわかるよ。戦っていたあの人たちの顔は、とてもつらそうな顔だったから。暴走したアラガミが私の方に向かってきたこともあるし・・・ゴッドイーターと協力して何とか倒したんだけど、同じアラガミを殺したりするってのは・・・ね」
「今は特に何もないので、平和と言えば平和なんですが…」
「最近は行方不明のアラガミが少しずつ増えてるから、そっちを考えないとね」
あちらもいろいろと苦労が絶えないようだ。残り日数で、いけるところまで行って、できれば解決まで持ち込みたい。
「ちょっと暗い話になっちゃったね。お詫びに、いいところに連れて行ってあげる」
「いいところ？」
「マキナ、あの場所・・・覚えてるよね？」

「とうぜんですっ！」
それから俺たちは、再びマキナと初めて会ったあの小屋に行くことになった。
Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

星菜ｓｉｄｅ

風が強いですね・・・顔が痛いです。
現在私達は、その「いいところ」目指して飛んでいます。小屋からは大分離れ、下には森しか見えません。
時折大型のアラガミの姿が小さく見えますが、すぐに通り過ぎてしまいます。
「寒いよ～！」
大声で千早が叫んでいた。
「バリアジャケットが高機動型仕様になっているからでしょう。あきらめてください」
「仕方ないな～。よいしょっと」
みると、結が上着を脱いでいた。って、
「あなたは寒くないんですか！？」
「大丈夫。周りにフィールドはってるから」
〜魔力量ＳＳＳ＋は伊達じゃありませんからね、マスター〜
「ありがと、結♪」
ニコニコ顔で上着を羽織っている千早・・・少しうらやましいです。
「どうかしたのか、星菜？」
「何でもないです」
弓弦が話しかけてくるが、そっぽを向いて答える。
「（なあ美妃、俺なんか変なことしたか？）」
「（乙女心というものだ。男の貴様にはわからんだろうがな）」
「（？？？）」
〜（相棒も、いろいろ勉強が必要だな）〜

と、近くで念話が聞こえていることは全く知らないわけで。
「大体ここら辺じゃなかったかな・・・」
「ちょっと待ってくださいね・・・はい、確かにここら辺のはずです」
「ここら辺って・・・」
「何も見えないのだが・・・一体どこにあるのだ？」
いったんその場所に降りる。そこは崖の近くで、あたりは草が生い茂り、ちょっとした広場になっていた。
一体何があるのでしょうか？
「っ・・・！」
「星菜？」
「・・・なるほど。確かにここは『いいところ』ですね」
目の前に見えたのは・・・真っ赤に燃えたぎる太陽が、ゆっくりと海にその姿を隠していく景色だった。
海は光を受けて宝石のようにきらきらと輝いており、鏡のように太陽を映している。
「うわぁ・・・」
「今まで見たことないぞ、こんな景色・・・」
「なんか、とても神秘的だねぇ」
「他の人たちにも見せたいものだが…いや、これはここに来た者だけの特権だな」
「自分も、ここに来た時は驚きで何もかも忘れるくらいだったわね。よくサクヤやリンドウと一緒に、ここで一杯飲んだりしたっけ」
「僕も見るのは久しぶりです・・・父さんと母さんと一緒に来た以来ですね」
ふと横を見ると、ジャケットを解いた剣也がカメラを取り出していた。
「みんなで記念写真撮りませんか？」
「いいわねぇ」
三脚を立て、逆光が来ないようにうまく場所を調整する。

「タイマーかけて…よしっ！」
急いで走ってくる剣也。
そして、隣に来ると肩に手をまわしてきた。
いきなりだったので、少しドキドキしている。
「星菜、どうかした？」
「な、なんでもないですっ！」
そこで、カメラのタイマーが切れ・・・写真が撮られる。
そこには、満面の笑みのシオさんとマキナ、千早。
口だけを少し笑わせ、腕組みをした弓弦と美妃。
そして、顔を赤く染めて下を向いた私と、それを心配そうに見ている剣也が写っていた――――

Ｅｐｉｓｏｄｅ６：純白のアラガミ、推参（後書き）

弓弦「結局、この後書きコーナーは作者が決めることになりました」
「こんな駄作に感想が来ることを期待した自分があほだったな・・・
アクセス数も、前作の方がはるかに多いという」
弓弦「まあ、まだ全然話が進んでないというのもあるがな」
「これからもがんばっていこう」
弓弦「次回は？」
「事件の核心に近づいていく話です。おそらく更新は結構遅れるこ
とになるかと」
弓弦「何故に」
「中間テストが来るんですよ・・・数学、基礎電気工学、物理がき
つい。文型の自分にとっては鬼門だよ・・・」
弓弦「頑張れ。では、次回をお楽しみに」

七夕特別番外編：星菜の願い事（前書き）

七夕ということで、久しぶりの更新＆七夕企画です。
特に面白い、というわけではありません。普通のお話です。
ちなみに時間軸はお話から一年前、剣也たちが４年生の時です。
では、どうぞ。

七夕特別番外編：星菜の願い事

時はさかのぼり、去年の7月7日。剣也の自分の部屋。
カタカタ・・・と、キーボードを打つ音が響く。打っているのは、剣也である。
今日は仕事は休みなのだが、ちょっとしたデータのまとめ作業をしていた。
〜そう言えば、今日はお父様が庭に何かを飾っていましたが、何かあるのですか？〜
「七夕だよ。一年に一度、織姫と彦星さんが天の川の上で会う、っていう日。俺たちは竹に願い事を書いた短冊を飾って、それがかなうように祈るんだよ」
「なにか、ロマンチックなイベントですね」
「とはいっても、かなうかどうかは分からないけどな」
夢のない発言である。隊長になっているからか、年に合わないような言動が時々飛び出したりしていた。
「夢のないことばっかり言っていると、本当に何もかなえられなくなりますよ？剣也」
と、星菜が突っ込みを入れながらアイスコーヒーを出す。
「夢は持っているからいいんです。たとえかなえられなくても、願うだけでも面白いものですし」
「そういうもんかねぇ・・・」
「そういうものです」
星菜もずいぶん丸くなったもので、最初のとげとげしい感じから普通の少女みたいになっている。まあそれでもまだ言動はきっちりしていて、落ち着いた態度は変わっていなかった。
「そう言えば、ほかの二人は？」
「千早はアースラの訓練室で模擬戦、美妃は無限書庫で読書中です」
ちなみに弓弦は自宅でギターを弾いている。

「そっか。ならこの作業が終わったら、少し準備するか」
「準備、とは？」
「短冊の準備。少し手伝ってくれるか？」
「わかりました」

「何にしようかな～」
「確かに、悩むな・・・」
「スパッと決めていいんじゃないか？単純なものとか」
「星に願うことなのに、そう簡単に決められますか」
「何気に星菜、ノリノリだな」
発言は、上から順に千早、美妃、俺、星菜、弓弦だ。ちょっとしたパーティー、ということで、弓弦とそのお母さんも呼んだ。
「懐かしいわね―。昔はよくやったものだわ」
「『プロ野球選手になりたい』とか書いていたっけな」
「私は・・・『お嫁さんになりたい』って書いてましたね」
上から順に、母さん、父さん、弓弦の母さんである奏さん。懐かしそうなものを見ている、と言った感じで、思い出話をしていた。
「よし、できた」
『早っ！？』
俺以外の４人全員に驚かれた。そんなに早いか？
「な、悩まなかったの？」
「全然。単純な願い事だし」
「なら、ちょっと見せてくれよ」
「いいぜ」
弓弦に二つの短冊を渡す。書いてあるのは・・・
『世界が平和になりますように』
『これからもみんなと一緒にいられますように』
と言った普通なもの。それを見て、弓弦は一言。
「まあ、妥当だな。当たり障りなく、それで言って願いことととしては最適なやつ」

「だろ？」
「でも、これでは夢がないのではないか？」
「これでいいの。さーて、飾ってこよー」
はしごを使い、少し高いところに短冊を付ける。
「アインス、そっちも書くか？」
［いいんですか？］
「まあ、願いがあるのなら」
［じゃあ、私も］
「［モードチェンジ、『ナイトスカイ』］」
アインスにバトンタッチして、さっき座っていた場所に戻る。
［のぞき見るものなんだから、俺は母さん達のところにいるよ］
と、ふよふよ～と言った感じでネクサスを別の机の上に。
［（さて、どんな願いを書くのやら・・・）］
少し笑いながら、その様子を見ていた。

星菜ｓｉｄｅ
「（どうしたものでしょうかね・・・）」
一つはすでにできている。残るは後一つなのですが・・・
「（他のみんなはもう書きあげていますし、残るは私のみ。このまま待たせるのも悪いですね）」
結局、悩んだまま短冊を一つ飾る。書いてあるのは『料理がもっとうまくなりますように』だ。部隊の料理は当番制なので、頑張って作っているのですがまだまだ剣也にはかなわない。
「せめて、女性らしいところは勝たないと」
と、つぶやきつつ短冊を飾る。まあ、一つでもお願できればいいでしょうし。

星菜ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

ＰＭ：１１：４５

リビングで、何か作業をしている人が一人。
「（全く、私も物好きなものです）」
先ほど残したもう一つの短冊を机に置き、パジャマ姿で悩んでいる星菜がいた。
「今日が終わるまであと少し。急がないと・・・」
「何してるの？」
「へ？」
現れたのは、剣也の母親であるほのか。突然の登場に、気の抜けた表情を浮かべる星菜。
「これは・・・短冊？もう飾ったはずじゃ」
「どうしてももう一つ決め切れなくって、ちょっと・・・」
「そうだったの。もう遅いし、急がないと明日に響くわよ？」
「そうなんですが、なかなか」
「そうねぇ…なら、誰にも言いたくないお願いを書いちゃえば？」
「誰にも言いたくない、お願い・・・」
それを聞き、少し星菜の顔が赤くなる。
「あらあら、恥ずかしい願いごとかしら？」
「そ、そう言うわけではないのですが、ちょっと・・・書きづらいというか、その・・・」
「なら、ちょっといってみて」
「は、はい」
ごにょごにょと、耳元でそのお願いをほのかに伝える。
「いいお願じゃない。それでいいんじゃないの？」
「で、でも・・・みんなに見られてしまいますし」
「なら、見えないようにちょっとさいくしちゃえばいいのよ。人の目には見えなくても、お星様はきっとかなえてくれるわ」
「・・・わかりました」
すると、星菜はペンでその願い事を書き、隠ぺい系の魔法を使って他人からは見えないようにした。一応不自然に思われないように、上には『家内安全』と書いてある。

「よい・・・しょ」
はしごを使うと音が出るため、少し浮遊魔法を使って上に上がり、飾り付ける。
「ありがとうございました、お母様」
「どういたしまして」
さて、星菜がどんな願いを書いたのかというのは・・・
読者様の皆様のご想像に、お任せします。

ちなみに翌日。
誰よりも早く起きた父親の一真が、仕事前にぱぱっと片づけ、その願いは書いた当人の星菜と母親のほのかしか知らない、ということになった。
「（よかった・・・）」

七夕特別番外編：星菜の願い事（後書き）

ちなみに、弓弦君の願いは
『もっと近接攻撃のキレを身につける』
『魔力集束の効率を高める』
と言ったもの。女性陣のお願いは・・・デリケートなことですので伏せましょう。まあ性格から判断してください。
ソニックの方でも書いてよかったのですが、さすがに時間軸があわなすぎなので却下。キャラクターが多いこちらの方を採用しました。
今度いつ更新するかわかりませんが、これからもよろしくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７：いざ行かん、事件の核心へ（前書き）

超久しぶりの更新となりました。
面白いかどうかは正直微妙ですが、楽しんでいただければ嬉しいです。
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７：いざ行かん、事件の核心へ

Ｅｐｉｓｏｄｅ７：いざ行かん、事件の核心へ

弓弦　ｓｉｄｅ

「・・・」

息抜きの日の、翌日。外は雨。俺は一人、資料を読みふけっていた。

「（２世紀前のアラガミの暴走…事件の首謀者は、ヨハネス・フォン・シックザール）」

ご丁寧なことに写真もある。セピア色の写真だったが、しっかりと写っていた。

「エイジス計画、ね。まあ、あんな事態になれば、あんな要塞だって作るか」

暴走したアラガミから人々を守るため、海に巨大な要塞（居住区）を作り、そこで生活するというもの・・・まあ、妥当な計画だった。表面だけは。

「なにしてるの？」

「千早か。まあ、外にも出れないんで資料をな」

「ふーん。とりあえずコーヒーね。今日は僕が作ってみた」

「ほう・・・」

こいつもずいぶん変わったもんだ。最初はおてんば娘で、正直何をやらかすか恐怖だった。

それが今ではこんな感じでコーヒーまで入れられるようになった。

何気にこいつの淹れたコーヒーはうまい。俺好みというか、とりあえずうまいのだ。

「他のみんなは？」

「ちょこちょこ情報が来てるから、それのまとめ。剣也はマキナと情報交換してる」

「当のお前は」

「美妃に『あいつも疲れているだろうから、コーヒーでももって行ってやれ』って言われてきただけ。戻ったらまとめ作業の手伝いだよ」
「ちゃんとやれてるのか？」
「馬鹿にしないでくれ。もう昔の僕じゃない」
「そうだったな」
千早は作業している部屋に戻っていった。持ってきてくれたコーヒーを一口飲み、また作業に移る。
〜相棒、ちょっと興味深いものがあるぜ〜
「なんだ？」
〜事件とかかわっていたゴッドイーターの記事だ。名前は・・・『雨宮リンドウ』〜
「リンドウって・・・」
〜マキナの父親の名前だな。まあ、苗字が違うからそれはないと思う。この人は結構功績を残してるから、おそらくそれにあやかってのことだろうよ〜
「そっか。とりあえず読んでみる」
しとしとと雨の音が響く中、俺は資料に目を通す。

弓弦　side　out

マキナ　side
「ふう・・・」
「大丈夫？つらかったら変わるけど」
「大丈夫。ちょっと背中が張っただけだから」
と、思いっきり背伸びをする。先ほどまで剣也さんと情報交換をして、持っているものすべての交換をしてまたあとで話すということに。
「アラガミ達からは、何か情報はあったかな？」
「みんな探してるわ。『いつも頑張っているマキナのためだ』って。

珍しくウロヴォロス系も動いているみたい」
「それはまた・・・あとで何がお礼しないと」
ウロヴォロス・・・山の様な体格で、昔は町をいくつも壊滅に追いやったとされるアラガミだ。あまり動くことはなく、近づいてきた虫や、少し歩いて藻などを食べたりする。性格は温厚で、他のアラガミからは『長老』と呼ばれたりする。
「ヨミは、体の方は大丈夫？」
「これと言ってないかな。今日は日も出てないし、むしろいいくらい」
「ならよかった。さーて、仕事に戻りますか・・・」
雨が降る音をＢＧＭにしつつ、作業を始める。
あの人たちがいるのは残り１週間くらい・・・急がないと！

マキナ　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

場所は戻って、剣也たちが止まっている宿屋。
カタカタと情報整理をしていたリインフォースのところに、一つ連絡が入った。
「ん…ネクサス、誰からだ？」
〜ミゼット提督からですが〜
「すぐに出してくれ」
ぱっ、とモニターに提督の姿が写る。少し引き締まった顔で。
『いつもお疲れ様ね。生態調査の方はどうかしら？』
「順調…とはいいづらいですね。ちょっと事件が起こってしまったので」
「今は、現地人の協力者と一緒に調査しているのですが、なかなか情報が集まらなくって・・・」
『そう・・・』
「なにかあったのですか？」
『いや、こっちの方でそちらの世界の情報が入って来たの。何でも、

違法に生体実験を行っている研究所がある・・・・ってね』
〜詳しい情報はあるんですか？〜
『鳥型のデバイスを使って、一応調査はさせたんだけど・・・突然、電源を切ったかのようにぷつりと通信が途絶えてしまって』
「そうですか・・・いや、むしろ好都合ですね。その通信が途絶えたところのポイントは、すぐに遅れますか？」
『ええ。すぐにでもできるわ』
「おねがいします」
「なるほどね・・・もしかしたら、つながっている可能性があるからな」
「ああ。明日にでもマキナと一緒に調査作業に移ろう」
〜じゃあ私は、それぞれのデバイスに通信しておきますね〜
「よろしく頼む」

「そうですか・・・わかりました。では、明日」
〜明日、か…準備はどうする？〜
「念のために、『あれ』を出すことになるね」
「マキナ、本気なの？」
ヨミが、心配そうな声で言う。
「大丈夫。いつもチューンナップはしてるし、実践だって、練習だってしてきてる」
そう言うと、小屋の隣にある小さな倉庫に向かう。
「よい・・・しょっと」
床に置いてある箱を取り除くと、電子パネルとテンキー、そして何かカードらしきものを入れるところがある。
「カード挿入・・・パスワード入力…よしっと」
ピー、と電子音がすると、ガチャリと鍵を開けたような音が響く。
マキナはその部分を開け、下にあった階段を下りる。ヨミもそれに続いた。
〜実践に使うのは、久しぶりなのではないか？〜

「だね。でも・・・そんなことは言ってられないから」
一番奥にあるドアを開ける。そこにあったのは・・・
サソリの針の様な方針がきれいにたたまれ、黒と赤の少し大きめな盾が周りを覆い、そして黒い刀身の中に青い宝石のようなものがついた一振りの武器があった。
「『四神刀青龍』、『アルバレスト真』『抗汎用シールド衛』。メンテナンスもばっちり」
〜道具は選別しなければな・・・〜
「私も手伝おうか？」
「うん、お願い」
こちらの方でも、着々と準備が進んでいた。

そして、翌日。
「それにしても結構でかい武器だなぁ・・・」
「まあ、『神機』ってそういうものですし」
マキナが住んでいる小屋の前で、全員が集合していた。
「留守番は任せておいて」
「お願いします、シオさん」
留守番はシオとヨミに任せている。一応、『本日休業』と看板は立てているが。
「（みんなも、いざという時はお願い）」
『わかった』
召喚獣であるアラガミ達にも念話で連絡をとる。
「ポイントまでは一気に飛んでいこう。みんな、忘れものとかはないな？」
『大丈夫（です）』
「じゃあ、作戦開始！」
『ｓｔａｎｄ ｂｙ ｒｅａｄｙ』
「ｓｔａｎｄｉｎｇ ｂｙ」
一斉にセットアップを済ませ、飛んで行った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ７：いざ行かん、事件の核心へ（後書き）

剣也「おいＭＨＰ３でハンマーしか使ってない作者」
ポッキー「うるさい！一番使いやすいんだよ！」
星菜「１２日から始めて、すでにハンマーの使用回数が４００回超えてるってどういうことですか」
ポッキー「だって・・・やりやすいんだよ。スタン取れるし、疲労しやすいし」
剣也「まあこのハンマー使いはおいておいて、この後書きの場所名はどうなるんだ？」
ポッキー「とりあえず仮の名前として、『ＮＦＤ寮１１１１号室』としてみた」
剣也「なんでそんな名前に」
ポッキー「ポッキーの日が１１月１１日なのと、俺が住んでいる（ネットがつながっている）のが寮だから」
剣也「なるほどね」
ポッキー「この作品についての質問や、キャラクター、作者に関する質問などはいつでもどうぞ。まあ、都合により答えられない質問もありますが」
剣也「よろしくお願いします」

Ｅｐｉｓｏｄｅ８：新しい仲間？フリューゲル推参（前書き）

新キャラ、というより新デバイスの様な新しい仲間が登場です。
ヒントは「ウルトラマンネクサス」。題名でわかる人は結構いるのでは？
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ８：新しい仲間？フリューゲル推参

Ｅｐｉｓｏｄｅ８：新しい仲間？フリューゲル推参

「消えたポイントは・・・ここだね」

〜結構奥まった場所ですね・・・〜

「僕もここら辺はあまり探索していませんね。よくこんなところで調査をしたものです」

森の奥、マキナもあまり知らない場所に、そのポイントはあった。木がうっそうと生い茂り、日の光さえほとんど届かない場所。夜でないにもかかわらず、相当な暗さを持っていた。

「それにしても、通信環境へのジャミングがひどい・・・美妃、原因はわかりますか？」

「今調べておる。おそらく機械的な要因が強いとは思うが、もしかすると原生生物にそのようなものがあり、その影響が強く表れておるのかもしれん」

〜コクーンメイデン種、だな。やつらは体から出る針にジャミング性能を持っておる。一体なら気にすることはないが、群生しているとこの様なことになる〜

「じゃあ、そのアラガミ達に念話ってできるかな、マキナ」

「やってみます」

マキナは目をつぶると、念話を開始した。だが、その表情に少し焦りが見えた。

「念話が・・・通じない？」

「ということは、機械的な要因と言うことですね」

「んじゃ、その機械をつぶしに行くか」

通信環境の問題から、まとまって移動することになった。

千早　ｓｉｄｅ

「うわ・・・ふじつぼみたいにびっしり」
「機械とはいっても、これは気持ち悪いな・・・」
僕たちはその機械がある場所に行ってみた。近ければ近いほど、ジャミングは強くなるから、それを頼りにね。
まあついたはついたんだけど、そこには壁一面にびっしりとジャミング装置がついていて、少し気持ち悪かった。暗いし、なんか目みたいに赤い点があるし。
「面倒だし、とっとと破壊しちまおう。剣、いけるな？」
「もち！」
弓弦は腕にポインターをつけた。最近あいつ魔力量増えてきてるしなぁ・・・魔力弾を撃つのにも余裕がある気がする。
それを見て、僕もバルフィニカスから魔力弾を撃つ準備をする。
「ネイビーバレット・・・」
「電刃衝・・・」
「「ファイアッ！」」
ドドド・・・と魔力弾がマシンガンのように装置に当たると、次々と爆発した。
誘爆したのもあったから、そこまで魔力を消費することもなかった。
「お見事」
「どういたしまして」
終わった後には、壁がすっきりとしたようになっていた。というかその壁ごと吹き飛んで、奥に通じる通路が２つ見えた。
「明らかに『何かありますよ』って言ってる感じするよね」
「確かに」
ともかく、僕たちは奥に進むことにした。

千早　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

結　ｓｉｄｅ
「明かりがついている、ってのは、正直助かるよね」

「無駄な魔力を使わなくていいからな」
「あたりに私たち以外の生体反応はなしです。なにか罠の様な気がしますが・・・」
私達は3人に分かれて行動していた。こっちが私と星菜、そして弓弦。
あっちがマキナ、千早、そして美妃。
「バランスを考えたら、こうなったんだよね」
「確かに大威力砲撃とスピードは分かれたな。あー、サポートもできたか、結は」
「サイレントヒーリング。仲間としては、本当に心強いですよ」
「まあね」
飛ぶ必要もないから、走って移動。というか天井が飛べるほど高くないから。
そうやって走っていると、少し開けた様な場所に。
「なにかきそうだな・・・」
「確かに」
「・・・来るぞっ！」
ゴウッ！と風を切るように何かが飛んできた。それは人と鳥を合体させたようなシルエットを持っていて、なおかつ魔力反応もあった。
「『セクメト』か？それにしちゃ色が黒っぽいけども」
資料を大量に読み込んでいた弓弦がいった。とりあえずマキナに連絡。
「マキナ、ちょっと戦闘に入ったんだけど」
『敵は？』
「弓弦が言うにはセクメトっていうらしいんだけど、なんか色が違くて、黒っぽいんだって」
『っ！？本当ですか！』
「そんなにびっくりしてどうしたの？」
『侵食種・・・まさかこんなところにいるなんて』
「侵食種って？」

『違法研究によって生まれてしまった、人とアラガミを融合させたものなんです。その技術は、禁忌としてとうの昔になくなって、風化してしまったはずなんですが・・・』
「出てきてしまった、というわけね」
『はい。ともかく、撃破をお願いします。通常のアラガミとは違って、知能も発達しているので苦労するとは思うんですが・・・』
「善処するよ」
ピッ、と通信を切る。相手が律義な性格だったようで、こっちが通信を終えるまで何もしてこなかった。
「相手は高速機動型だ。おまけに炎熱系の攻撃をしてくる。一撃が結構思いから、きっちり防御すること。いいな？」
「了解」
あっちは誘うように手招きしていた。上等じゃない！

結　side　out

そのころ、結たちがいる場所とは全くの正反対の場所。言ってみれば、日本とブラジルの様なところ。
環境も逆で、植物なんてほとんどない。一面砂ばかりである。
その地下・・・誰にも知られていない地下遺跡の中。
〜（・・・）〜
石で造られた飛行機の様な物体が、心臓の鼓動を奏でるかのようなリズムで振動していた。
〜（私ノ出ル時ガ、来タヨウデスネ）〜
それは一瞬で姿を消すと、地上に上がり・・・ものすごいスピードで飛んで行った。
そのすがたを、一匹の山の様な龍が見ていた。ぼーっとした感じで。
「（あ奴が出る時が来るとはのぉ・・・どうやら、大変なことが起きそうじゃわい）」

弓弦　ｓｉｄｅ
「ちっ！」
「高速機動型って、こんなに早いもんなの！？」
「千早並みに速いんじゃないですか！？」
炎をまとったまま突っ込んでくるセクメト侵食種。そのスピードは段違いであり、普通に千早並みのスピードで行動していた。
「アクセルっていっても、１０秒で決め切れる気がしねぇ・・・」
〜隊長さん、身体強化系の魔法ってのは蒐集行使の中に無かったのか？〜
「あることはあるけど、時間稼いでくれないと・・・第一、引きつけてくれても知能が結構高いから無駄になりそうな気がする」
そう話していると、一気にこっちに突っ込んできた。
「あーもう！結、テスタロッサのソニックフォーム、実現できないのか？」
「やだよ！あんな恥ずかしい恰好できるはず無いじゃない！」
「戦いに集中してくださいっ！」
そんだけ言っているということは、結構やばい恰好なんだろう。
「（それにしてもらちが開かねぇ・・・少しでもいいから敵の動きが止められればっ！）」
敵の位置を確認し、剣を腰に構える。猛スピードで突っ込んでくるなら、この攻撃は反応しずらいはず！
「でりゃああっ！」
『！？』
居合気味の一閃。おまけに１８０度広がる魔力刃を飛ばした。さすがにいきなり飛んできたのにびっくりしたのか、急いで飛びのいた。だが・・・
「俺も日々、努力してるんでね！」
魔力刃を方向転換させ、後ろを向いていた相手にたたきこんだ！

「さすがですね」
「この程度でやられる敵でもないだろうがな」
敵がゆっくりと起き上がってきた。その背中には、魔力刃で切った跡が残っていた。
『・・・』
空気が、変わった。今までよりも鋭く、張り詰めたような空気。
ちゃき、と剣を再び構える。結も同じように不知火を構え、星菜は防御の体勢をとった。
それから数秒ほど、間が開いて・・・
なにかが爆発する音と同時に、猛スピードで突っ込んできた。
「「「っ！」」」
ガキィン！と剣で受け止める音が響いた。だが、攻撃は止まらない。
「弓弦っ！」
お返しとばかりに星菜が魔力弾を飛ばすが、即座に回避して再び突っ込んでくる。
「このっ！」
結も剣を双剣にして、連続で魔力刃を飛ばす。だが、それに対して相手は炎の玉を飛ばして相殺した。
［結、ユニゾンを！］
「今使ったら、この後の戦いに響くよ！まだ奥に道はあるから」
こうなったら・・・
「アクセルでつぶす！セット時間、稼いでおいてくれよ！」
「「わかった（了解）！」」
無駄な魔力を使わないようにして移動する。アクセルでつぶすなら、一気に魔力をためてたたきつぶすしかない。
二人はできる限りのスピードで撹乱していた。牽制がてらに魔力弾もうっている。
「（残り１０秒・・・）」
これなら、と思った次の瞬間、相手がこっちに照準を向けてきた。
「弓弦っ！」

結がさえぎるように回り込もうとするが、相手はそのスピードを超えて飛んできた。
やばい、ストップするまでの時間がかかる・・・！
〜相棒っ！〜
駄目か、と思ったその時。
銀と赤色をした飛行機の様なものが飛来し、セクメトをはじき飛ばした。
それは結の前に移動すると、こういった。
〜初メマシテ、夜天ノ騎士。私ノ名前ハ『フリューゲル』。ドクター・アルトリアノプログラムカラ、アナタヲマスタートシテ登録シマス。ヨロシイデスカ？〜
そう、結に向けていった。
「う、うん。どうぞ」
〜・・・登録完了。命令ヲオ願イシマス〜
「と、とりあえず・・・あいつ倒すの手伝って！」
〜了解シマシタ。バトルモードニ移行シマス〜
それは機械的な音声を立てながら変形し・・・なんかプリズムで作られた人型の人形みたいになった。
大丈夫なんだろうか、こいつは？

弓弦　side　out

Ｅｐｉｓｏｄｅ８：新しい仲間？フリューゲル推参（後書き）

～ＮＦＤ寮１１１１号室～

ポ「今回出てきた『フリューゲル』は、『ウルトラマンネクサス』にでてくる「ストーンフリューゲル」から取っています。バトルモードは遊戯王の「Ｅ・ＨＥＲＯプリズマー」を銀色にした感じですね」

剣「いろいろと混ぜてきたなぁ・・・」

ポ「まあ、ネクサスは歴代ウルトラマンの中で一番好きだから。当時の自分にとっては怖かったけれども」

剣「大人向けのウルトラマン、っていう話だからなぁ」

ポ「まあ、ドラマみたいで面白かった。次回はセクメト戦の決着です」

剣「お楽しみに～」

Ｅｐｉｓｏｄｅ９：機械仕掛けの守護者（前書き）

おそらく一番文字数が少ないんじゃなかろうか、という今回のお話。
ロボコンが忙しくて投稿できませんでした。ごめんなさい。
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ９：機械仕掛けの守護者

Ｅｐｉｓｏｄｅ９：機械仕掛けの守護者

星菜ｓｉｄｅ

「・・・すごい」

ただ、それだけだった。それも当然だろう。

〜久シブリノ戦闘。ココマデ激シイモノダト、肩慣ラシニハ十分デス〜

敵の攻撃を難なくさばき、それでいてしっかりと攻撃を返すフリューゲルと言った戦闘機…いや、今は戦闘マシン、と言った方が正しいかもしれません。

人よりも力が強いのは当たり前だ。だが・・・

『・・・・！』

敵が放つ超高速な攻撃さえも、障壁の様なもので受け止め、魔力弾を放って返していく。

〜プリズムビット、展開〜

銀色のとがった物体が４つ、体から離れて空に浮いた。そして敵に照準を合わせたかのように制止すると・・・

〜ＧＯ！〜

その声とともに、先端から出た魔力刃で一気に攻撃を仕掛けていった。

その動きにほんろうされ、まともにセクメトは動けなくなっていた。

「・・・もうあの一機でいいんじゃないでしょうか、この戦闘」

「・・・俺もそう思う」

私と弓弦がそう言っている中、突然マスターとなった結はその戦闘を食い入るように見ていた。

「古代ベルカの技術力、恐るべし」

〜いや、それを言ったら私も古代ベルカのデバイスですからね？〜

［同じく私も］
相方の一機と一人が突っ込んでいた。
〜マスター、私デハ敵ヲ倒スノニ力不足デス。力ヲ借シテイタダケマスカ？〜
「う、うん。わかった」
〜アーマードモードへ移行シマス〜
そう言うと、人型だった形は姿を変え・・・５つのパーツに分かれた。ちょうど胸、両肩、両足に合うような形だ。
それがまるでロボットが合体するかのように結に装着された。見た目的には、弓弦の装甲を薄くし、機動性に優れた感じにしたものだ。
〜全体出力向上・・・マイスターも、良くここまでのものを残してくれたものです〜
「それじゃ・・・いくよっ！」
だん、と床を蹴った瞬間、その体は一気にセクメトへと肉薄する。
『！？』
腕をクロスし、防御態勢に入る。だが・・・
「蒐集行使、『鉄槌の騎士』。インパクト…」
右手を大きく振りかぶる結。
「シュラークッ！」
バキ、と何かが折れるいやな音を響かせながら、セクメトは大きく吹き飛ばされた。
だが、まだ倒れてはいない。
「決めるよ、フリューゲル」
〜了解シマシタ〜
ガチャン、と装甲が外れ、再び形を変えたかと思えば、それは弓の様な形に変貌した。
〜マキシマムモード、発動。敵、ロックオン〜
「こっちも行くぞ、相棒」
〜了解！〜
「私達も行きましょう、ルシフェリオン」

反応するかのようにコアが明滅した。
「アクセルモード、発動！」〜ｓｔａｒｔ　ｕｐ〜
エンジン音とともに、その姿が消えた。と思った次の瞬間には、青い三角錐が４つほど相手に突き刺さる。
こちらもカードリッジを２発ほどロードし、砲撃の構えをとった。
「アローレイ・・・」
「アクセルデルタ・・・」
「ディザスター・・・」
魔力でできた弦と矢を引き絞り、相手に狙いをつける結。空中に飛び、けりの構えをとる弓弦。そしてディザスターヘッドの先端に魔力をチャージする私。未だにダメージが抜けきっていないセクメトは、腕をクロスしたまま、翼を前方に回して完全に防御態勢をとった。
「シュトロームッ！！！」
「スマッシャーッ！！！」
「ヒートッ！！！」
４つのキックが相手に直撃し、直後に３連続の砲撃が間髪いれずにたたきこまれる。
最後に結がその矢を離した瞬間・・・爆発的なスピードで飛んで行った矢は敵の防御をやすやすと貫き・・・奥にあった扉さえも吹き飛ばした。
もちろん、その狙いをつけていたセクメトは木っ端みじんに吹き飛びあとかたもなくなった。びちゃり、と血が地面に落ちる音がする。
「・・・なんちゅー威力」
〜不満デシタカ？〜
「むしろ十分すぎ。でも、ありがと。フリューゲル」
弓の形から、再び戦闘機形態に戻る。
「さっさと先に行こう。あっちはもう先に行ってるだろうし」
「「了解（です）」」
そうして私達は、奥に向けて走り出した。

星菜　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「大丈夫でしたか？」
「うん。思わぬ助っ人が来たから」
〜フリューゲルト言イマス。ヨロシクオ願イシマス〜
合流した結たちは、いったん休憩するかのように止まった。
「若干ダメージがあるようですね。魔力減少もいくらか・・・とりあえずこれを」
結達に、それぞれ２つ錠剤の様なものが渡された。
「これは？」
「『回復錠』と『Ｍアンプル』です。体力回復と、魔力回復用の薬ですね。何かあったら大変なので、もっていける数だけ用意しておきました」
と、ジャケットのベルトについていたポーチを見せる。中にはいろいろな錠剤と、手榴弾の様なもの、四角い箱の様なものが入っていた。
「これって、手榴弾では？」
「いえ、『スタングレネード』です。爆発はしますが、殺傷能力はないんですよ。言ってみれば閃光弾の様なものですね。目くらまし用です」
「なるほどね」
そう言いながら、結は錠剤を飲んだ。それを見て、星菜と弓弦も口にする。
〜おお、確かに魔力が回復してるな〜
「体もいくらか軽くなってるし・・・カートリッジシステムが使えない魔道士とかには、これで回復しつつ常に高い魔力を使う、ってのもありだな」
未来性に期待している弓弦である。
「そう言えば、千早や美妃達の方はずいぶんと楽な表情ですが、何

もなかったんですか？」
「うん。全くと言っていいほどなにもなし。まあちょっとした防衛システムがあったくらいかな」
「全部破壊させてもらったがな。肩慣らしにもならん」
「なるほど・・・」
三人の調子が戻ったところで、先に進む６人。
「人間と別の生物の融合、か・・・やっぱりやばいところはやばいね」
「別の世界にもありそうだ。早めに対処していきたいが」
と、ポツリポツリと会話をする結と弓弦。
「一番怖いのは、人間を『人工的に』作っちゃうこと。それなら、いくらでも実験できるし、失敗しても簡単に処理できる」
「地球よりも技術が元から高いからな。あり得るのは当然かもしれん」
そのまま歩いていると、少し大きめの扉の前にたどり着いた。
「ここは僕がやります。バレット『ＪＧＰ－焔』。銃身を『クラリオン砲　炎』に」
そう言うと、マキナがもっていた神器の砲身が粒子の様になり、新たな砲身へと変わった。
見た目としては、黒いラッパにところどころ赤い線が入ったものだ。
「シュートッ！」
そう言うと、砲身から弾丸が飛び出し、扉を貫いていった。貫通した跡には、周りが溶かされたかのような状態になっていた。
「アンプルアンプルっと・・・」
即座にアンプルを飲んだマキナ。その行動に、千早が質問した。
「１発撃っただけなのに、なんで？」
「消費魔力を大分食うんです。抑えるために『トリガーハッピー』という、消費魔力の半分をスタミナの消費で賄うものをつけているんですが・・・それでも結構使っちゃうんですよ」
「なるほどね・・・」

ガチャン、と神器の刀身を出したマキナ。それを見てか、結は不知火を、弓弦はセイバーを展開する。
「暗いな・・・」
「魔力弾をいくつか浮かべればいい」
「俺とか十六夜の魔力光じゃ暗い。結、頼めるか？」
「りょーかい」
と、魔力弾を浮かべようとした次の瞬間。
「ようこそ、私の『実験室』へ」
部屋の明かりがつき、奥には一人、メガネをかけ、白衣を着た一人の男性が立っていた――――

Ｅｐｉｓｏｄｅ９：機械仕掛けの守護者（後書き）

～ＮＦＤ寮１１１１号室～
剣也「ロボコンお疲れ様」
作「どーも」
剣也「活動報告では結果だけ挙げていたが、実際のところどうだった？」
作「ボールがバンバン飛んでいくのがほとんどだった。ランプレーなんかほとんどなし。アメフトがテーマっぽかったけどね」
剣也「なんてこった」
作「終わったことなのでもう流す。と、言うことでＧＯＤＥＡＴＥＲ編もラストに近づいてきました」
剣也「次回をお楽しみに」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：ＧＯＤＥＡＴＥＲ（前書き）

正直戦闘描写を久しぶりに書いたので、自信がない今回のお話。
ＧＯＤＥＡＴＥＲ編もあと少しで終わりです。では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：ＧＯＤＥＡＴＥＲ

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：ＧＯＤＥＡＴＥＲ
「実験…室？」
「にしては、ずいぶんと大きな実験室ですね」
結達が入った場所は、普通のドームくらいの大きさがあった。男性と結達が立っている場所はちょうどま逆の位置で、ちょっとした高台になっている。
「・・・これ、見たことあるぞ。『エイジス計画』の資料に、写真で載ってた」
「ほう、良く知っているね。そのとおり、ここはそのエイジスの内部を忠実に再現した場所さ」
ジャキ、とマキナが剣を研究者に向ける。
「どうしてあなたがここにいる・・・オオグルマ・ケンゴさん」
「そんな物騒な物を向けないでくれ、マキナ君。仮にも同じ「アラガミ研究者」だろう？」
「僕はあなたと同じような立場になった覚えはない！あなたがやっているのは、生命に対する冒涜だ！」
「どういうことだ？」
「あの人は、昔アラガミについての研究で大きな成果を上げたんです。それが2年前・・・だけど、あまりにも残虐すぎたんです。その研究が」
「当然だろう？何かを成し遂げるには、それ相応の対価がいるものさ。等価交換、という言葉を知っているかね？」
「そうだとしても、あなたの考えは間違っている！」
「ふう・・・やはり君と私は相いれないようだね。仕方ない」
ゴゴゴ・・・と、オオグルマの立っているところがリフトの様にもちあがる。
「手荒なまねはしたくなかったのだが、こうせざるを得ないのでね」

そう言うと、指鳴らしをしてもう一つリフトを上昇させた。ただ、それに乗っていたのは・・・
「ッ、シオさんっ！」
「マキ・・・ナ・・・？」
「シオさんに何をした！」
「何、少し強めの睡眠剤を投与しただけさ。体に影響はほとんどないよ」
今にも食ってかかりそうなマキナに対し、オオグルマは落ち着いた表情を浮かべていた。
「取引をしようじゃないか、マキナ君。君がこちらに来れば、このアラガミの安全は保障しよう。来なければ・・・わかっているね？」
「くっ・・・」
苦虫を噛んだような表情を浮かべるマキナ。だが、
「バルフィニカス、スプライト」
〔了解〕
バンッ、と空気を破裂させた音が響き、一筋の青い閃光が飛んでいく。
狙いは、リフトに乗っているシオ。
「極光剣『追の太刀』！」
リフトの根元を切ると、落下する塩を抱え、再び破裂音を響かせて元の場所に戻る。
当然、その当事者は・・・
「警備が甘すぎるんじゃないの？もうちょっと歯ごたえのあるものにしてよ」
「上出来だ、剣」
剣千早、ＮＦＤの中でも最速を誇る魔導士である。
「なっ・・・なんだと！」
「形勢逆転、ですね」
「いつでも、どんな状況でも動けるようにこっちはいつも訓練しているんです。簡単に負けはしませんよ」

「くっ・・・ならば私が直々に相手をしてやろう！」
オオグルマはリフトから降りると、生えるように地面から出てきた神器を手に取る。
「みなさん、ここは僕が行きます」
「一人で平気なの？」
「大丈夫です。というか、この戦いは、僕が決着をつけなきゃいけないんです」
高台から降りると、１つ錠剤を取り出す。
「神薬、服用」
噛み砕くようにそれを飲むと、マキナの周りに青白い魔力が膜のように発生する。
「行くよ、白蓮」
｛ああ。決着をつけようぞ！｝
「ふふ、いつでも来て構わないよ？」
研究者対アラガミ使いの戦いが、はじまる。

ガキィン、と、ブレード部分が衝突する音が響く。
マキナの刀身は、『獣剣　老陽　改』。オオグルマの刀身は、『レーヴァテインＥＢ』。
奇しくも、マキナの親友であるヨミ（ツクヨミ）の素材で作られている武器だった。
「ホールド性能で私を止めるつもりだが・・・そうはいかないよ！」
いったん距離をとるオオグルマ。そのまま剣を縦に構える。
「インパルスエッジ！」
「くっ！」
ロングブレードは、自分のスタミナと魔力を消費して打つことができるインパルスエッジという技がある。これにより、剣の状態のままで遠距離攻撃ができるのだ。
「ロングブレードじゃなくたって！」
魔力弾を形成し、インパルスエッジと相殺させる。

「ほう、魔力のない私には到底できない芸当だ。だが・・・」
即座に銃形態に変えるオオグルマ。
「こちらにも意地がある！」
銃身は『ファランクス　極』。それから打ち出したのはホーミング性能のある弾丸。
「こっちだって！」
こちらの銃身は『オヴェリスク』。氷属性の弾丸を弾幕の様に展開し、打ち消した。
「（今のところは押されてばかり・・・だけど！）」
ダンッ、と強く地面をけり、相手に肉薄する。
「これまでずっと、アラガミ使役と魔法だけ使ってきたわけじゃない！」
刀身を換装する。その刀身は・・・『クラウディア』。
凍てつく冷気とともに、怒涛のラッシュ攻撃を決める。
「そんな剣では、傷つけられないよ！」
〜どうかな？〜
「何？・・・なっ！」
なぜオオグルマが驚いたのか・・・それは、冷気をまとった刀身での連続攻撃により、神器が凍りついていたのだ。
「くっ！」
このままでは自分まで凍りつく。そう考えたオオグルマは、神器を手放していったん離れようとした…だが、それが間違いだった。
神器使いとして、多くの知識を持っていたのは、マキナである。当然、その身体機能もわかっているわけであり・・・
神器使いの体が強靭になっていることは、熟知していたのである。
「でええええええええええええりゃあああああああっ！」
剣を袈裟がけに振り下ろした。ただの一閃・・・だが、それで十分だった。
「ぐ・・・あああああああっ！」
鮮血を飛ばしながら、１０メートルほど飛ばされるその体。近くに

落ちた血は、即座に凍った。
「・・・」
まだ構えを解かないマキナ。
「・・・」
無言で返すオオグルマに、後ろで見ていた結は違和感を感じた。
「なにか、おかしい」
「どういうことだ？」
「もともと神器使いっていうのは、『オラクル細胞』っていうのを体に取り込んでいて、強靭な肉体を持っているんだ。それがただの一撃で倒れるなんて不思議だと思う」
「それがわかっているからこそ、マキナはまだ剣を解かないってわけだ」
一歩ずつ後ろに歩を進めるマキナ。目はまだ倒れたままのオオグルマに向けられている。
「くっ、くくく・・・はははは！」
むくりと、気味の悪い笑い声をあげながら、その体は立ち上がった。
「面白い、実に面白いよマキナ君！もう君とこんなもので戦っているような状態ではないねぇ・・・くくく」
「何がおかしい」
「面白いに決まっているじゃないか。なぜなら・・・」
ごごごごご・・・と、細かく地面が震え始めた。
「僕の最高傑作を、この場で、君に見せることができるのだから！」
上からゆっくりと降りてくる一つの物体。それを見て、マキナは驚愕した。
「なんで・・・なんであれがまだ残っている！？」
「クローン体、と言えばわかるかな？最初に作られたあのアラガミの細胞を、何年もかけて育て上げ、ついにここまでこぎつけたのさ！これでぼくは、この世界を堕とす！」
その物体・・・いや、アラガミの名は、『アルタノーヴァ』。
エイジス事件に深くかかわったアラガミである。

「この身人間から離れようとも、僕は生きる！アラガミとしてねぇ」
「狂っている・・・っ！」
「ああ。そう言ってもらって構わないよ。むしろ、その方が好都合だ」
上部にある空洞部分に、ゆっくりとリフトでその体が運ばれ…落とされた。
その瞬間、アルタノーヴァの体に光がともされる。その色はオリジナルとは違う、黒に近いような青色。
「堕天種…厄介すぎるっ！」
『さあ始めようじゃないか！神が残るか、人が残るかの大勝負をね！』
この世界の命運をかけた勝負が、始まる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１０：ＧＯＤＥＡＴＥＲ（後書き）

～ＮＦＤ寮　１１１１号室～
作「最近ロックマンエグゼにはまり始めた私」
マキナ「執筆してくださいよ！」
作「いやー、久しぶりにやると面白くて。プリズムコンボの汎用性は異常」
マキナ「プラネットマンで絶望してしまえ」
作「ネップウ＋ファイア＋３０連続スロットインで終わるわ」
マキナ「やりこみ乙」
作「ぐッ、その返しは予想してなかった・・・」
マキナ「作者さんはほおっておいて、僕が主体のＧＯＤＥＡＴＥＲ編もあと少しで終わりです！次回もお楽しみに！」
作「次回、マキナ無双です」

Episode11：GODEATER>>BURST（前書き）

今回のお話、約５７００字です。
いやー、前後編に分けようかと思ったのですが、この形の方がいいと思ったのでこういう形に。
携帯で見る方、ご了承ください。
では、どうぞ。

戦闘ＢＧＭ：Ｄｏｕｂｌｅ－Ａｃｔｉｏｎ　Ｓｔｒｉｋｅ　ｆｏｒｍ

Episode11：GODEATER&gt；&gt；BURST

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１：ＧＯＤＥＡＴＥＲ＜＜ＢＵＲＳＴ

「マキナ！」

巨大になった敵を前に、飛んでいこうとする結。

「馬鹿もの！」

その首根っこをひっつかんで止める美妃。それでも動くことをやめない結。

「なんでとめるの！？」

「言っただろう、マキナは「決着をつける」と。これはあ奴の戦い…我々が手出ししてよいものではない。それがわかったら、動くのをやめろ」

「・・・わかった」

しぶしぶ飛ぶことをやめた。だが、その視線はマキナに向けられたままだ。

「（頑張って、マキナ・・・っ！）」

マキナ　ｓｉｄｅ

〜アルタノーヴァ・・・今まで資料でしか確認したことはなかったが、やはり大きいな〜

「『長老』ほどじゃないけどね。それでも、大きいし厄介なことには変わりない」

体力回復と魔力回復、そしてスタミナ回復用に回復薬改、Ｍアンプル改、レーションを服用する。神薬はいざという時だけだ。

「どんな属性も効果的に効くのはないから・・・スピードで一気に責め立てる」

〜あれ（・・）を、出すのか〜

「うん。もうためらっている暇なんて無い。これは僕たちの、この

世界を守るための戦いなんだ」
召喚用の魔法陣を出す。相手がアラガミならば、こっちだってアラガミを使う！
「永久の凍土より来たれ二つの刃よ・・その迅(はや)さと刃で、目の前の敵を駆逐しろ！」
詠唱した瞬間に、辺りに冷たい風が吹く。そのアラガミの名は――――
「出でよ、『双刃龍』カリギュラっ！」
［ぐるおおおおおおおおおおおおおおっ！］
全身を青い鎧に覆われ、背中には巨大なブースター、その両腕には刃を備えたハンニバル種の別個体・・・カリギュラが、その姿を現した。
［ぐるう？（久しぶりだなぁ、マキナ。今日はどういった要件だい？）］
「今日はちょっとね、重要な用件で出したのさ」
そう言うと、カリギュラはアルタノーヴァ堕天の方を向いた。
［ぐるる・・・（なるほどね。とりあえず、あいつをぶっ倒せばいいんだな？）］
「物わかりがよくて助かるよ」
その背中に飛び乗り、自分も相手の方を向く。氷属性のアラガミだから、少し寒く感じる。
『今まで見たことのないアラガミだね・・・ハンニバル種に似てはいるが』
「ええ。今まで自分の特に親しい人にしか見せていませんから」
［ぐるうっ！（さあ、派手に行こうぜマキナ！）］
「ああ。全力で行くよ！」
『神となった私の力を、思い知るがいい！』
勝つんだ。この先の未来のためにも！

マキナ　side　end

『はあっ！』
弾幕の様に光弾を飛ばしてくるアルタノーヴァ堕天。だが、
［（ぬるい！）］
その合間を縫うかのように、カリギュラは飛んで躱す。カリギュラの持ち味は、その機動力と高い攻撃力にある。
背中にあるブースターが、巨大な体を縦横無尽に動かすための機動力を支えているのだ。
［ぐるおあっ！（これでもくらいな！）］
口に冷気を充てんし・・・相手に向かって打ち出した。
『甘い！』
それを、アルタノーヴァ堕天は半透明の壁を発生させて打ち消した。
「遠距離がだめならっ・・・」
［ぐるうっ！（近づくまでだ！）］
さらにカリギュラはスピードを上げると、敵の目の前でUターンをした。
『怖気づいたのかい？』
「まさか」
旋回する直前で飛び降りたマキナが、剣を振りかぶっていた。
「刀身変形、『アメノムラクモ　真』！」
細身の刀身が、巨大なオレンジ色の巨大な刀身へと変わる。
叩きつけるようにして男神の手のあたりに振り下ろす。
『ぐうっ！』
敵の体に一筋傷が入る。それを確認したマキナは、一気に下がって距離をとった。
［ぐおおおっ！（こっちも忘れんじゃねえぞおっ！）］
腕にエネルギーをチャージし、空中に浮いていた。
『舐めるなっ！』
先ほどよりも濃い色の壁を展開した。だが・・・
カリギュラのブースターが生む推進力は、そんなものでは止まらないのであった。

「行って来い、カリギュラ！」
［ぐるおああっ！］
腕にためていたエネルギー体が壁に直撃すると、それはガラスを破るようにして砕けた。
敵の懐に潜り込んだその体は、もう止まらない。
『双刃龍』。その証を解放する。
ジャキィン、と金属音を立てて両腕から現れたのは、青い二つの刃。
それを振りかぶり・・・
クロスするように、敵の体を引き裂いた。
『ぐ・・・うおああああああああっ！』
激痛の声をあげながら、これ以上は追撃させまいと腕を振るアルタノーヴァ堕天。
それを見越していたのか、すでにカリギュラは距離をとっていた。
「終わりにしてやる！」
剣を正眼に構え、突撃の体勢をとるマキナ。
突撃をしたその体は相手の懐に入り・・・縦一文字に、相手の体を一閃した。
「・・・」
［ぐるる・・・］
倒れ伏したその敵。１ミリたりとも動いてはいないが、まだ気は抜いていない。

「終わった・・・の？」
「わかんねえ・・・あ、コアを摘出する感じだな」
結達は離れた場所からマキナの姿を見ていた。手にしていた神器は刀身が引っ込むように姿を変え・・・中から凶暴な獣の頭の様なものが出てきた。
「なんですか、あれは？」
「『プレデターモード』。ああやって倒したアラガミは、コアを摘出しない限り復活するんだそうだ。安全な状態に持っていくための

処置だな」
ぐちゃ、とその神機がかみつくと、持ち手の部分のクリスタルが少し光った。コアを摘出したあかしだ。
「もう安全だな。マキナー！」
「・・・」
弓弦が呼びかけたが、まだマキナは神器を手放すこともなく、召喚したカリギュラを戻すこともしなかった。
「どうかしたのかな？」
「わかんないな・・・」
だが、マキナが構えを解かなかったことを、彼らは痛感することとなった。
『うおおおおおおおおおおおっ！』
「っ！？」
「嘘ぉ！？」
驚愕の表情を浮かべる千早と美妃。コアを摘出したはずのその体が、何事もなかったかのように再びその身を起こしたからだ。
「簡単には、終わらないってことかよ・・・」

戦いは、まだ終わらない。

マキナ　ｓｉｄｅ
「ハンニバルみたいな感じだね・・・」
［ぐるぅ（ああ。まさかあんな感じになるとは思いもしなかったが）］
目の前で声を上げるその体は・・・どす黒い黒に染まっていた。
もはや意思は感じられない。おそらく、オオグルマの意思は完全にアラガミに飲み込まれてしまったのだろう。
〜アルタノーヴァ侵食種…こんなものは初めて見たぞ〜
「データにも載ってないだろうね・・・」
［ぐるる・・・（腕が鳴るなぁ。これ倒したら周りの奴らに自慢で

もすっか）」
「そんなこと言わないの。今は眼前の敵を倒さないと」
と、僕は再び神器を構えようとした。その瞬間―――
見えない力で、思いっきり地面にたたきつけられた。
「～～～～～っ！？」
「（か、体が・・・動かねえっ！？）」
顔だけ挙げると、そこには煌々と天輪を輝かせている侵食種の姿が。
〝マキナ！大丈夫か！？〟
「結構厳しい・・・っ」
立ち上がることすら厳しい状態。なら・・・
「意地でも、立ち上がってみせる！」
徐々に力を込めて、右腕を動かす。手を伸ばした先はポーチの中の錠剤入れ。
その中の一つだけある赤いケースに入れてある錠剤を、一つ取り出す。
「強制解放剤改・・・服用」
その白い錠剤をかみ砕く。その瞬間、体中に力が満ちていくのを感じる。
「（解放剤は使えて二錠・・・もって１分３０秒だ。それまでに終わらせないと・・・）」
きしむ体を何とか持ち上げ、神器を持ち上げる。
刀身は小回りのきく『シュヴァリエ　極』。どれだけ聞くかは分からないけど、やるしかない！
「でやあっ！」
人型の方に連続で攻撃を仕掛ける。だがほとんど通っていない。
やっぱりショートブレードだと威力が小さい・・・なら！
「破壊力で押し切る！」
今度は『双神触角　真』で、破砕の威力にかけることにした。
「ぶちぬけぇっ！」
さっきよりも手ごたえはある・・・だけど、効いている気がしない。

「（1つ目の時間が切れる・・・2つ目を使うしかないっ！）」
すかさず2つ目を取り出して服用。確かに体は動くけど、体がさっきより重い。
強制解放剤は自らの体力を犠牲にして強制的にバースト状態・・・いってみればフルドライブモードにするものだ。
本来ならアラガミを捕食してなるものだけど、いざという時にのみこれを使用する。
だからこそポーチの中の赤いケースに入れてあるのだ。
「一撃にすべてを込めるしかないっ・・・」
刀身を『激重ハンマー』に変え、体躯増強錠９０改を服用。
剣の攻撃速度は驚くほどに落ちるが、一撃にすべてを込めるならこれでいい。
「一撃必殺・・・」
渾身の力を込めて、振り下ろす。だがその時だった。
僕の体は、地面を離れ・・・遠くに吹き飛ばされていた。正確には、最初立っていた高台の壁に。
「か・・・はっ！」
のどの奥から何かがこみ上げてくる。たまらずにそれを吐きだした…その色は、真っ赤に染まっていた。
同時にバースト化も切れ、ほとんど体が動かせなくなった。
「う・・・くうっ・・・」
目の前には、いまだに天輪を光らせる敵の姿。言ってみれば、黒い太陽だ。
だが、僕にとっては絶望でしかない。
と、その人型の部分の両腕に光がたまっていく。
〜マキナ、動け！動かなければ、死ぬぞ！〜
「わかってる・・・よ・・・」
〜（くっ、あの機能を解放するしかないか・・・？）〜
なにか白蓮がいった気がするが、ほとんど聞こえなかった。
少しでいい。頼む、動いてくれ僕の体・・・！

だが、願いは届かなかった。無情にも敵の腕から、巨大なレーザーが放たれたのだ。
ごめんなさい、皆さん。ぼくは・・・
［ぐるおおおおおおっ！］
あきらめたその瞬間、獣の悲鳴が響いた。その出所は・・・
［ぐるるる・・・（簡単に…あきらめてんじゃねえぞマキナ・・・）］
カリギュラが、その両腕の刃をぼろぼろにしながら立っていた。
［ぐるぅ（この世界の人たちを守りたいんだろ？男なら、最後まであがいて見せろよ！）］
「で、でも今の僕じゃ・・・」
「いけるよ・・・マキナなら」
「結さん？」
上にいるであろう結さんの声が響いた。
「マキナの思いを、力を、全力でぶつけてやればいい。あなたには、それだけの力があるはず」
と、体全体が軽くなった。なんで？
〜マスターハ魔法陣ノ展開ナシデ回復魔法ヲ使エルノデス〜
なるほどね・・・
〜マキナ、この世界を守りきる意思は、本当だな？〜
「当然」
〜わかった・・・なら、我も本気を出そう〜
「へ？」
突如白蓮が淡く輝きだし…止まった後は、真っ白な手袋に金色のフェンリルの紋章が刻まれたものに変わっていた。
〜カリギュラ、まだ動ける余裕はあるな？〜
［ぐるる（ああ。ブレードは壊されちまったが、まだ腕はあるからな）］
〜十分だ。ならマキナ、今から我が詠唱する言葉をつづけて行ってくれ〜

「う、うん」
壁に寄りかかるようにして立ちあがり、少し前に出る。
〜我、神を操りし者なり〜
「我、神を操りし者なり」
〜その魂と、その体、一つになる時〜
「その魂と、その体、一つになる時」
〜ここに、その力を解き放つ！〜
「ここに、その力を解き放つ！」
その瞬間、僕の体とカリギュラの体が発光した。
「行くよ、カリギュラ！」
「（おう！）」
次に言う言葉は、自然と頭の中に流れ込んでいた。
「身紳融合・カリギュラ！」

マキナ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

マキナとカリギュラの体が輝いた。その影は、やがて一つになっていく。
そして、その輝きがはれた後には・・・
「『身神融合』カリギュラ、装備完了！」
関節の部分が黒く染まり、体全体を青い鎧で覆われたマキナの姿があった。
背中にはブースター、頭の兜はどこかカリギュラを思わせる形である。
〜よし、精神と身体はキチンと同調しているな？〜
「白蓮、これって・・・」
〜お前の母・・・私の元使用者のサクヤ・ユークリウッドが使用できた機能だ。名づけて『身神融合』。アラガミと精神と体を一体化させ、極限にまで戦闘力を上げる機能だ・・・まあ、アラガミと限りなく心を通わせなければ無理だがな〜

「そうだったんだ・・・」
「（お前の母さんは特にアラガミに優しかったからな。できて当然か）」
拳を開いたり閉じたりするマキナ。どうやらなじみ具合を確かめているようだ。
「気をつけてね、マキナ」
「はい」
そして、腰を低くした体制をとった。
「氷刃石火・・・」
そうつぶやいた瞬間には、マキナの姿はアルタノーヴァの後ろにあった。
同時に、男神の両腕が切り落とされる。
「・・・アクセルフォームとほぼ同じスピードじゃねえか・・・！」
「切断面がほぼまっすぐです・・・なんて切れ味ですか！」
怒ったのか、天輪を光らせるアルタノーヴァ。そのまま、女神の両腕からレーザーが弾幕の様に発射される。
だが、マキナはその隙間を縫うようにして回避していく。カリギュラと融合している今の状況では、こんなことは朝飯前なのであった。
「コキュートスビルム・・・」
敵の攻撃をかわし、今度はマキナの右腕に冷気が収束していく。
その腕を左手で支え、大砲を撃つような構えをとる。
「発射！」
その弾が男神に当たる。その体は一瞬で氷塊へと変わった。
「砕け散れ！」
高速で斬撃をたたきこみ、氷塊を砕く。砕け散った後には、まるでダイヤモンドダストの様に氷の粒子が舞い散っていた。
「これで、本当に終わらせる！」
氷腕の刃を展開し、空高く跳び上がる。目標は、女神のみになったアルタノーヴァ侵食種。
「こい、インキタトゥス！」

そう言うと、足元に氷でできた一頭の馬が現れる。それに飛び乗ると、一気に加速して敵に接近する。
だが、そこまでの時間はかからなかった。なぜならば…
相手が何か行動を起こす前に、その体は八文字に切られていたからだ。
「氷刃二連双撃斬…」
そう言うと、インキタトゥスは氷の粒子となって消え、それと同時にアルタノーヴァ侵食種も真っ黒な粒子となって消えさった。
「融合解除」
その言葉で、マキナとカリギュラが分離して元の姿をとる。
「勝った・・・んだよね」
〈ああ。間違いなく、お前の勝利だ〉
「ぐるおうっ！（よくやったな、マキナ！）」
と、喜びの声を上げていたが、突如ぐらぐらと地面が振動しだした。
「な、何！？」
「おそらく自爆装置か何かをしかけていたんだろう。全く最後までいやな奴だ！」
「急いで脱出しましょう！」
「了解！」
そして一同、無事に研究所から脱出した。
後には、がれきの山となった元研究所だけが残った。
こうして、戦いは終わったのだった。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１１：ＧＯＤＥＡＴＥＲ＆ｇｔ；＆ｇｔ；ＢＵＲＳＴ（後書き）

～ＮＦＤ寮　１１１１号室～

作「疲れた・・・」

星菜「お疲れ様です」

作「最初に、前回感想をくれた　片翼の鍵　様、ありがとうございます」

星菜「何でもこの話は前々から考えていたとか」

作「正直この話を今のところ一番書きたかった。思いっきり戦闘描写書けるからね」

千早「でもその間の話を書くのが難しかったからこんなに遅くなったんでしょ？」

作「まあ…ね。この点は反省点でした」

美妃「このだめ作者が」

作「うう・・・いい返す言葉がない」

美妃「で、次の話はどうするのだ？」

作「次回でＧＯＤＥＡＴＥＲ編は完結。それから少し間をはさんで、新しい物語が始まります」

千早「次回をお楽しみに！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：一仕事終えて（前書き）

ＧＯＤＥＡＴＥＲ編、完結です。
これから少し日常編やらなんやらをはさんで、次のステージへと向かいます。
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：一仕事終えて

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：一仕事終えて

リインフォース　ｓｉｄｅ

私達は今、生態調査・・・本井悪質な研究を行っていた研究所を破壊し、その後いろいろな話をして元の世界、つまり地球に戻ってきた。

「今回は、あまり力になれなかったな・・・」

〜大丈夫ですよ。あの時はマキナさんの戦いだったわけですし・・・次何かあったら、頑張ればいいんです〜

「そうだな」

まあ、あのあとあったことを話すとしようか――――

リインフォース　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「つ、疲れた・・・」

「少し待っておれ、回復魔法をかける。結のものよりも回復量は少し低いが、それでも高度なものであることに変わりはない。

現在６人はマキナの住居兼仕事場の小屋に戻り、体を休めていた。

すでにジャケットは解いており、結も剣也の姿に戻っていた。

「それにしても、アラガミと融合するなんてね」

「アインスを常に中に入れている俺も確かに融合していると言えるが、デバイスじゃないのにあそこまでしっかりと融合するなんてなぁ・・・」

「自分でも驚きですよ。でも結構体力消費が激しいんで、これから訓練を積んで頑張っていかないと」

「でも、あまりむちゃしないでよ？マキナ」

ヨミがお茶を机の上に置く。後ろからはシオがお茶菓子を運んできた。
「そういや、留守番の間に一本電話が入ったわよ」
「要件は何ですか？」
「『今日いきなり来るから、お茶とお菓子用意しておいて』だって。誰からか来たかは分からないわ。聞く前にあっちが電話切っちゃったから」
「・・・なんかものすごく嫌な予感が」
「なんで？」
その答えを言う前に、突如小屋が揺れた。
「な、なに？」
「地震ではないようです。強風でしょうか・・・？」
マキナがやれやれといった表情でドアを開ける。そこにいたのは・・・
「マキナ、久しぶり！元気してた？」
「ぐるる・・・（久しいな、マキナ。どうだ、調子の方は）」
「元気だし、大丈夫だよ。姉さん、ディア」
真っ黒な鎧に身を包んだ一人の女性と、同じく真っ黒で、巨大な二本の角を持った竜の姿があった。
「で、でかっ！」
「アラガミ…ではないようだな。なんだこりゃ？」
「マキナ、この子たちは誰？」
「僕の友達…って言えば早いかな」
「なるほどね・・・よっと」
竜から降りた女性は、元気な声でこういった。
「初めまして。マキナの姉の『ミレーナ・ユークリウッド』よ。よろしくね」
「お、お姉さん？」
「ああ・・・そう言えば言ってませんでしたね、僕には姉がいるってこと。来ると連絡がなかったから、言う必要もないと思ったんで

すけど・・・この人の性格をすっかり忘れていた」
「家族の性格を忘れるなんて、姉さん悲しいな・・・」
オヨヨ、と軽い泣きまねをするミレーナ。
「そんなことしても何にもならないから。とりあえず入って。疲れてるでしょ？」
「うん。長い間飛んでたからおなかすいちゃった」
「ディアも、ゆっくりしていってね」
［ぐるる（心遣い感謝するぞ、マキナ）］
そう言って、ぞろぞろと小屋の中に戻ったのであった。

美妃　ｓｉｄｅ
「先ほどのあの巨大な竜・・・あれは何ですか？」
「あれは『飛竜』っていうの。正式には『ディアブロス亜種』。私の相棒よ」
「ほう…相棒、ということは、まさかとは思いますが・・・」
「そう、私もマキナと同じ『心通話』を使えるの。で、私はそう言う竜種、というか伝説とかで語られたりする部類の種族を主に相手にしてるのね。で、そう言うのはここと全く逆の・・・簡単に言うと、この星の裏にいるわけ」
「と言うことは、あなたはとんでもない距離を飛んできたのでは？」
「まあね。まあ私の相棒はそんなことじゃばてたりする程やわじゃないからさ」
驚いた。夜天の書の中にいた時でも、さまざまな主の元にわたり沢山の世界を見てきたつもりだったが・・・まだまだ知らないことは多い。
「そういやマキナ、最近よくアラガミが消えたって聞いたけど…どうなの？」
「原因はつぶしたよ。ついさっきね」
〜こ奴も『身神融合』を使えるようになったのでな。この年でよく習得できたものだ〜

「本当に!?さっすが私の弟、あっちに帰ったら自慢できるわ!」
〜少しは落ち着いてください、主。姉としての気品が足りませんよ?〜
「わかってるわよ『テンペスト』。少し興奮しただけ」
〜ならいいのですが・・・〜
その後、先程あった出来事をマキナがミレーナに話した。
「ほえー、そりゃお疲れ様。シオさんもいってくれればよかったのに」
「本当に来るとは思わなかったのよ。あなたの性格から考えて、きまぐれで『あ、やっぱり行くのやめた』とかありそうだし」
「う」
「まあまあ。今日すぐに帰るわけじゃないんでしょ?今日は結構人も多いし、張り切って料理作るからさ」
「お、久しぶりのマキナの手料理かぁ。楽しみ」
「俺も手伝うよ」「私も」
剣也と星菜も手伝うようだった。仕方ない、我も手伝ってやるとするか・・・

美妃　side　end

その後、朝方まではしゃぎ合い、ぐっすりと寝た剣也たち。
時刻は昼過ぎ。その中で、美妃が一番早く目を覚ました。
「ん・・・んっ・・・」
目をこすり、寝ぼけ眼でゆっくりと起き上がる。
寝ていたのはソファの上だ。マキナが「女の子なんですから、ベッドで寝たらどうですか?」といったのだが、美妃が頑としてこれを拒否。そのままこうなった。
ドアを開け、太陽に照らされた木々を見る。
「もし、あの時あいつに出会っていなければ・・・このような景色を見ることは、なかったのだろうな」

しみじみとつぶやく美妃の背中は、少しうれしそうだった。
ごそごそと、ポケットの中から待機形態のエルシニアクロイツを取り出す。
「倒され、友達になり、名前をもらって、仲間になって」
思い出すように、言葉を紡ぐ。
「世界を知って、知識を得て、今に至るわけか」
小屋の壁に寄りかかり、片手で太陽の光が直接目の中に入らないようにしながら空を見る。
「こうやって青い空を見ることが、素晴らしいと思うとはな・・・ふっ、昔の我が見たらどう思われるだろうな」
「美妃さん、ここにいたんですか？」
「・・・マキナか。皆はどうした？」
「まだ寝てますよ。僕はさっき起きたばっかりです」
マキナが隣に立ち、そして座った。
「これから、どうするつもりだ？」
「今までと変わりませんよ。今も・・・そしてこれからも」
「・・・そうか。いろいろあると思うが、頑張れよ」
「美妃さんも、頑張ってください」
「ああ」
二人を、優しく太陽が見守っていた。

「アインス、何をしているんですか？」
「星菜か。まあちょっとした事件報告書を自分用にまとめていただけさ」
「なるほど。そう言えば剣也、士郎さんから『新しいコーヒー豆を仕入れた』と連絡が」
「お、それなら翠屋に行かないとな。星菜、なんか用事あるか？」
「いえ、何もないですが」
「じゃあいっしょに行こう。アインス、戻って大丈夫か？」
「ああ。別にかまわない」

剣也の姿に戻ると、そのまま星菜の手をとった。
「ひ、引っ張らないでください！」
「悪い悪い！」
二人の顔は、笑顔だった。

「じゃあマキナ、今度会う時まで」
「うん。元気でね、姉さん」
「ぐるう（世話になったな、マキナ。また会おう）」
鎧に身を包んだミレーナが、ディアブロス亜種の背中に飛び乗ると、その巨体は瞬く間に空に上がり・・・飛んで行った。
〜さて、これからどうするのだ？〜
「決まってるよ。いつも通り、お客さんの相手とみんなの健康管理」
「私も手伝うよ」
「ありがとう、ヨミ」
別の世界でも、二人は笑顔だった。
ＧＯＤＥＡＴＥＲ編　完結
〜Ｔｕｒｎ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ！〜

とある世界の、一つの屋敷の内部。外は激しい雨が降り、時折雷が鳴る音が響く。
その中に一人、少女がいた。ライトグリーンの髪に、真紅の双眸を瞳に宿している。
その顔からは、何も読みとれない。真紅の瞳だけが、暗い部屋の中でやけに目立っていた。
「（私は、いつも、独りぼっち・・・）」
雷鳴が、空に響いた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１２：一仕事終えて（後書き）

～ＮＦＤ寮　１１１１号室～
作「ＧＯＤＥＡＴＥＲ編、完結～」
剣也「ずいぶんとかかったな。この小説が始まって７ヶ月くらいたってるぞ？」
作「まあ、途中で別の小説に手を出して自爆したりしたからな・・・」
剣也「まったく・・・」
作「ちなみに次のステージは結構早く終わる予定。そこまで戦闘描写とかないし。どっちかというと話が多い」
剣也「ほう・・・」
作「まあ、次回をお楽しみにということで」
剣也「見てくれた読者の方々、ありがとうございました」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３：フェイトからの告白（恋愛じゃないよ？）（前書き）

ＴＰＰが完全施行する前になるべく多く更新していきたい今日この頃。
今回はフェイトからの剣也に対してのある重要な告白。
題名にもある通り、恋愛がらみではないのでご注意を。
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３：フェイトからの告白（恋愛じゃないよ？）

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３：フェイトからの告白（恋愛じゃないよ？）

剣也たちＮＦＤがフェンリルでの任務を終え、５月も半ばにさしかかったある日の日曜日。

え、ＧＷはどうしたって？そりゃＧＷ中にもお仕事はあるわけですから、ちょっとした外食くらいしか大した外出はしていないわけで。

「ＧＷくらい休ませてほしかったなー」

「隊長のあなたが言ってどうするんですか。夏には長期休暇をもらえるんですから我慢してください。第一、上の部隊には私たち以上に忙しい部隊もあるわけで・・・（グチグチ）」

「わかってるよ。言わないと爆発しちゃうんだよ」

「それはそうですが・・・」

と、ネクサスに一本の通信が。

「誰からだ？」

〜フェイトさんからです〜

「出してくれ」

同時に視覚を共有し、モニターを出す。

『こんにちは、剣也』

「よう、フェイト。なにか用か？」

『あの、今日の午後・・・開いてるかな？』

「星菜、何か重要な予定あったか？」

「いえ、あるのはちょっとした書類整理くらいです。行くのであれば、私の方でやっておきますが」

「悪い、頼む」

「わかりました」

星菜との話を終えると、再びモニターに向き合う。

「ということで午後は開いた。どこかに集合するか？」

『そうだね・・・じゃあ、臨海公園のベンチで』
「了解。じゃあ昼飯食って13時くらいに来るわ」
『うん。わかった』
通信を切ってモニターを閉じ、視覚共有も解除する。
［・・・］
「ん、どうかしたか？アインス」
［いや、何でもない。少し考えごとをしただけだ］
「そっか」
［（テスタロッサ・・・『あのこと』を言うつもりか）］
心の中で、不安を抱えたリインフォースであった。

剣也　ｓｉｄｅ
「と、ここで大丈夫だな」
予定時間より15分くらい早く来てしまった。まあ、女の子を待たせるわけにもいかんからこのくらいがちょうどいいだろう。
そーいや、俺がフェイトか呼び出されたって千早に行ったらなんか意味深なこと言われたんだよな・・・

「フェイトから呼び出された？」
「ああ。何の用事かは知らんけど」
「・・・そっか」
「どうかしたのか？」
「いや・・・うん、とりあえずこれだけは言っとくよ。『フェイトから何を言われても、きちんと受け止めて』」
「はあ・・・」
「それだけ覚えておけば、僕からはなにも言わないよ」

「一体何なんだろうな・・・」
そう思いながら、ベンチに腰掛ける。４月も終わり、少し日差しが暑くなってきた。

「剣也！」
「お、来たか」
走りながらフェイトがやってきた。うーむ、なんか転びそうな予感が・・・あ。
「うわっ！」
予想的中！ほんの少し足に魔力をかけて走り、受け止めた。
「ったく、少しは落ち着けっての」
「ご、ごめん」
ま、とりあえず話を聞こうじゃないの。

剣也　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

「で、話ってなんだ？」
「うん。そのことなんだけど・・・」
一度言葉を区切り、深呼吸を2，3回するフェイト。
「剣也はさ、私が夢の中に出て来たって話・・・覚えてる？」
「ああ、覚えてるよ。というか、あの日は忘れもしないと思うぞ」
剣也が夢でフェイトが人形だと聞いた時の夢。その日、剣也はリンディに呼び出され、なんだかんだあってぶち切れて拳で障壁を破壊した日である。（詳しくは前作の第８話参照）
「そのことがどうした？」
「それね・・・本当なんだ」
「っ！？」
それからフェイトは、自分の生い立ちを話した。
自分は自分の姉である『アリシア・テスタロッサ』のクローンであること。
母である『プレシア・テスタロッサ』は自分の一人娘を蘇生させようとし、結果的に生まれてきたのが自分であること。
結果、蘇生は失敗し、自分は『人形』として扱われていたこと。
その後、プレシアの命令で「ジュエルシード」を集め、なのはと出

会ったこと。
自分が人形ということを知らされ、絶望したがなのはやその他の人々によって今に至ること・・・様々なことを話した。
「あの夢、本当だったのかよ・・・」
「うん。おそらく私のリンカーコアが書に取り込まれていた時だったと思うから、何かしらの影響でそうなったのかもね」
「まじか・・・」
背もたれに思いっきり寄りかかり、腕で日差しを遮りながら唸る剣也。
「剣也はさ、この話聞いてどう思った？」
「どう、とは？」
「私の事、人間じゃないんだ・・・って思ったりとか、気持ち悪い・・・とか」
「・・・」
「私もね、話すのはすごくこわかったんだ。でも友達として、ちゃんと私の事を伝えとかなきゃだめだって。だからこそ今言ったの」
「・・・ちょっとこっち向け、フェイト」
「へ？」
フェイトが剣也の方を向く。すると剣也はそのおでこに向けて――――
「そい！」
「いたっ！？」
思いっきりデコピンを当てた。痛かったのか、フェイトは顔を俯かせて悶絶している。
「クローンだとか人間じゃないとか気持ち悪いとかどうでもいいっての・・・フェイトは友達にそんなふうに思ってほしかったのか？」
「・・・ううん」
「なのはとかユーノとかが事実を知っても普通に接してくれてるだろうが。俺とフェイトはすでに友達なんだ。そんなことをいまさら知らされても何も変わらない」
「・・・」

「フェイトはフェイト。『フェイト・テスタロッサ』っていう人間で、この世に一人しかいないんだ。もし、おまえがクローンだなんだかんだ言われて傷ついてるんだったら・・・」
「だったら？」
「俺がそう言ってるやつらを全員ぶっ飛ばす」
「そ、そんな物騒な」
「友達が傷ついてるの見て平気な奴がいるかっての」
当然だろ？といった表情でフェイトの方を向いて話す剣也。
「わかったこの話はおしまい。これでなんにもなしだ」
「う、うん」
剣也の勢いにのまれるように、話は終わった。と思った時、フェイトが剣也に抱きついた。
「は？」
「ごめん。少しだけ、このままでいいかな？」
「・・・ああ」
剣也はフェイトの感情がわかっていた。喜びと、悲しさが混じった状態。言ってみればうれし泣きの様な感じだ。
「泣きたいんだったら泣け。周りにはだれもいない」
「うん・・・」
そのまま、フェイトは小さく嗚咽を漏らしながら泣いた。その背中を、優しく剣也が撫でた。
穏やかな日差しが、二人を見守るように照らしていた。

「ただいまー」
「お帰り。フェイトどうだった？」
「お前、分かって言ってるだろ」
帰ってきた剣也に、千早が話しかける。
「まあね。オリジナルの事はわかってるし、僕以外にも星菜や美妃、アインスだってわかってるよ」
「そうだったのか・・・」

[すまないな。重要なことだからどうしようかと思ったのだが・・・勝手に言ってしまうのはどうかと思ってな]
「僕も同じ」
「言わないでくれてよかったよ」
そう言った剣也の背中は、大切なことをうち開けてくれたフェイトへの感謝と、すがすがしさが漂っていた。

その日の夜のことである。
「こんばんはー」
「どなたですか？」
久しぶりの夢の中、剣也はとある人物と出会っていた。
「私は『アリシア・テスタロッサ』。フェイトのお姉さんです」
「こんばんは・・・で、こんな時間に何の用ですか？明日は仕事あるんで頭を早めに休めたいんですが」
「まあまあ落ち着いて。私はあなたにお礼を言いに来たの」
「お礼？」
「そう。今日あなたがフェイトに行ったことは、ちゃんと私も聞いてたからね。あなたのおかげで、だいぶフェイトも楽になったと思うんだ。ありがとう」
「どういたしまして」
「私からはこれだけ。あの子は優しいし、まあ時々天然だけど、私の立派な妹だから。フェイトには『これかも頑張ってね。いつでも見守ってるから』って伝えといて」
「了解です」
「じゃ、フェイトをよろしくねー」
そう言って、アリシアは闇の中に消えていった。

翌日の朝。
「昨日の夢にさ、フェイトのお姉さんが出てきた」
「ええ！？」

「『これからもがんばってね。いつでも見守ってるから』だそうだ。
お姉さんの分まで、頑張れよ」
「うん！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１３：フェイトからの告白（恋愛じゃないよ？）（後書き）

～ＮＦＤ寮　１１１１号室～
作「昨日はポッキーの日、ということで一日遅れだがポッキーを持ってきた」
弓弦「おー、いいねぇ」
作「昨日はどじょうがＴＰＰ参加を表明したということで、さまざまなところでいろいろとした談義が行われているわけだが・・・」
弓弦「確かにな（ポリポリ）」
作「完全に参加する、と決まったわけじゃないんだよね。つまり一定以上の署名なりなんなりが集まって、それがちゃんと政治家のところに届けばまだどうにかなる可能性はあるわけだ」
弓弦「『まだだ。まだあわてるような時間じゃない』みたいなもんか」
作「そういうこと。まあ自分も参加したときに備えて一時捜索用のネタを少しは考えておくけどね。しばらくはなのはに集中します」
弓弦「がんばれ」
作「次回は『あの』科学者との出会いです。おたのしみに～」

作「そういやフェイトとはどうなった？」
弓弦「『剣也とほとんど同じこと言うね』って言われた。まあ『お姉さんの分まで頑張れよ』とはいったが」
作「さいで」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：名（迷）科学者？ジェイルさん（前書き）

超原作ブレイク回。これによりだいぶ話が変わってきます。というかすでに変わっているところもちらほら。
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：名（迷）科学者？ジェイルさん

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：名（迷）科学者？ジェイルさん

「あっちの世界の技術力はすごいなぁ・・・」

「なんだいきなり」

現在時は飛んで夏休みのある日。ＮＦＤ本部がある御崎家。

今日は仕事も休み。なのだが弓弦は暇つぶしのためにやってきていた。

「いや、あっちの世界にはこんな介護用ロボットがいるんだと」

「どれどれ・・・」

［私もみせてもらおう］

視覚を共有し、弓弦が見ているミッドチルダの雑誌を見る。

「なになに・・・『意思を持った介護用ロボット、名を『ガジェット』。自分で物事を考え、行動し、介護者に安心した生活をお送りします』ねぇ」

［開発者は『ジャック・ステイル』・・・特許を持っているのか］

「こっちの世界と違って人型じゃないってのがすごいと思ったし、なおかつ自分で考えられるんだからすごいと思ってな」

「美妃か何かに言ったら工場見学に飛んでいきそうだ」

「へくちっ！」

現在、その美妃は図書館で読書中である。

「まー、とんでもない科学者だろうし、とんでもなく忙しそうだから会えそうにもないがな」

「そうか？こんなにシンプルなら工場でぱぱっと作れそうなもんだが」

［人を対象とするものなんだ。そう簡単に量産にこぎつけるとした

らとんでもない技術力だぞ」
「確かに・・・」
現在進行形で障害者の剣也にとっては納得できるものである。
だが、人生には偶然というものが存在するわけであって――
別の日、とある管理世界の森の中・・・というか上空。
「なんでこんな時に雨降るの―っ！？」
「知りませんよ！おてんとうさまにでも聞いてみたらどうですか！？」
またも生態調査に狩り出され、仕事を終えて市街地に戻ろうとしたその時、飛行中に突然大雨が降りだしたのだ。
ちなみに、現在いるのは結（剣也）、星菜、そして美妃。
「ごちゃごちゃ言うでない！早く雨をしのげる場所を探すぞ！」
美妃が後ろで吠える。
「あ、あった！」
結が指さしたのは森の中でその一部分だけが開け、その地点にちょうどいい感じでほら穴がある場所だった。
「早く行こう。風邪ひいちゃったりしたらいやだ」
「同感です」
「右に同じく、だな」
スピードを落としてほら穴に滑り込むようにして着地。ジャケットも解除する。
「うわ、髪がめちゃくちゃぬれた」
「タオルなんて持ってないですよ」
「ハンカチならあるが・・・言っていても仕方あるまい」
各自持っているもので対処することにしようとした…その時だった。
「？」
奥の方に、一瞬きらりと光るものを星菜が見つけた。
「奥の方に、何かあるみたいです」
「なんだかわかるか？」

「正直この暗さじゃなにも・・・」
「向かってみるか、剣也、星菜」
「どうせ雨もすぐやみそうにないしな・・・暇つぶしついでに行ってみるか」
３人は奥に向かうことにした。

星菜　ｓｉｄｅ
「これは・・・」
「ドア、か？」
「あの一瞬光ったのは、センサー用のＬＥＤか」
私達は今、あの光があった場所へとやってきていた。先ほどの光はセンサーライト用のＬＥＤだったらしく、今はそれが反応してライトが光っている状態だ。
「ご丁寧なことに、インターホンまである」
「ちょうどいい。タオルを貸してもらうとしよう」
ピンポーン、と美妃がためらいもなくインターホンを押した。
〜どちら様だい？〜
「えーっと、外でいきなり雨が降り出して、ここに入って雨宿りしていたのですが・・・髪がぬれてしまっているんです。もしよければなんですが、タオルか何かを貸していただきたいのですが」
〜構わないよ。風邪をひくといけないから早く入りたまえ〜
ガチャリ、とドアが開く。開けたのは、紫色の髪に金色の瞳を持った男性だった。
『失礼します』
私達は家の中に入った。中はきちんとした家になっていて、とても洞窟の中にあるとは思えない。
「お茶を用意しよう。ウーノ、いいかい？」
「はい、ドクター」
奥から薄い紫色の髪の女性が出てきた。
「いえ、そこまでしてもらわなくても・・・」

「体を冷やすと危ないだろう？どうせ外はまだ雨なんだ、ゆっくりしていくといい」
「じゃあ、お言葉に甘えて」
私たちはリビングのソファに腰掛ける。
「自己紹介がまだだったね。私の名前は『ジェイル・スカリエッティ』。まあ君たちには、ジャック・ステイルと名乗った方が早いかな？」
「ってことは、あの介護用のロボットの『ガジェット』を作った科学者ですか！？」
「介護用だけではないけどね。工業用にも出しているよ。今ではスポンサーの方々が工場で作っているさ」
「なんて技術力だ・・・」
隣にいる剣也が茫然としていた。障害者である剣也にとっては、自分の様な相手を介護するロボットが量産できるというのはやはり素晴らしいものなのかもしれない。
「元は、こんなものに使うつもりはなかったのだがね」
「どういうことですか？」
「ふふ、聞きたいかい？」
こくり、と無言でうなずき、その話を聞くことにした。

星菜　side end

「ガジェットの元の目的は、言ってみれば戦争・・・質量兵器の類だった」
「なっ！？」
スカリエッティから言われた言葉に、美妃は驚き、剣也は再び茫然。星菜は無言だった。
「私は管理局の最高評議会に生み出された。最初は命令道理に動いていたのだが・・・」
「だが？」

「正直飽きてしまったんだよ。彼らの命令のままに動くのはしゃくだった、というのもあるがね。それから私は偽名を使い、あのようにガジェットを改造して世のために広めたのさ」
「管理局…やはりまだ闇は深そうだ」
「ほう、こんな小さな子供が管理局の裏に触れているのかい？」
「一応、こういうものですから」
名刺をスカリエッティに渡す剣也。それを見て、スカリエッティの顔が変わる。
「三提督の後ろ盾があるとはね・・・大した部隊のようだ」
ずず、とウーノが持って来た紅茶を飲みながら語る。
「こっちも表は普通の部隊ですが、裏ではいろいろな違法研究所の破壊とかやってますから」
「同じような状況、というわけだね。面白い」
くくっ、とのどの奥で笑うその顔は、おもちゃに興味を示した子供のような笑いだった。
「いや、本当に面白いよ君たちは！よし、私からも何か情報提供をしよう。まだ最高評議会とはつながっているから、いろいろな情報が入ってくるだろうしね」
「いいんですか？」
「構わないよ。もし君たちが大きくなり、実力をつけ、管理局内でも最高の舞台になった時には・・・あの評議会の老人たちをどうにかしてほしい。そうすれば、管理局も生まれ変わるだろう」
そう言ったスカリエッティの顔は、笑顔だった。
「了解しました。ＮＦＤ部隊長御崎剣也、誠心誠意頑張りたいと思います」
びしっ、とたって敬礼をする。それに倣うように星菜と美妃も敬礼をする。
「頼もしい子供たちだ。これからの活躍に期待しているよ」
それから剣也たちはガジェットの事や世界の事、世間話などをして、雨が上がったのを確認して帰って行った。

スカリエッティ　ｓｉｄｅ

「本当に面白い子供たちだったよ」

「でもドクタ～？あんなに話しちゃってよかったんですかぁ？」

ゆったりとした声でクアットロが話しかけてくる。

「大丈夫だよ。あの子たちには、未来を生き抜いていく力がある。大人の私達はそれをサポートしていくのが仕事なんだよ」

「そうですか・・・ドクターがそう言うなら」

Ｎｏ　Ｆｕｔｕｒｅ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ・・・そうなるように願いたいものだ。

スカリエッティ　ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

Ｅｐｉｓｏｄｅ１４：名（迷）科学者？ジェイルさん（後書き）

～ＮＦＤ寮　１１１１号室～
作「筆が止まらねえ」
マキナ「いいことじゃないですか」
作「そのせいで後書きのネタが思いつかん」
マキナ「別にいいんじゃないですか？」
作「そりゃそうだが・・・やっぱり何か書きたいじゃん？そう思ってると、別の先生方の前書きと後書きがすごいと思ってくるところがあるわけで」
マキナ「例えば？」
作「顔文字とかキャラの性格とか他のアニメのセリフとかを思いっきり利用する作者さん（実名は挙げません）。面白い」
マキナ「作者さんも使えばいいんじゃないの？」
作「私にそんなネタのボキャブラリーがあると思うかい？」
マキナ「・・・ないですね」
作「ストレートに言われると傷つくわ・・・」
マキナ「落ち込んじゃった作者さんはおいておいて、次回は御崎家の年越し＆初詣です！どうぞお楽しみに～」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：年越しと初詣（前書き）

昨日の活動報告にも書きましたが、明日より１２月１日までテスト勉強＆テストのため一切の更新を停止いたします。
読者の方々、申し訳ありません。
では、どうぞ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：年越しと初詣

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：年越しと初詣

「大みそかだな」

「そうですね」

時は、ジェイルさんとの出会いからまた飛んで１２月３１日。大みそかである。

御崎家は現在６人という結構な大家族であるため、大掃除もあっという間に終わってしまっていた。

「本当に視覚共有できるのが助かるんだよな。今までは廊下掃除くらいしかできなかったんだぞ？それが今じゃどこでも掃除できるんだから」

［お前と結婚する奥さんはとても楽できそうだ］

「右に同じく」

縁側に腰掛けながらコーヒーを飲む二人。ちなみに千早と美妃は年越しそば用の買い出しに行っている。

「よくよく考えてみれば、年越しの行事って初体験じゃないのか？三人と守護騎士たちって」

「そうですね。目覚めた時期もそうですが、行事は初体験です」

「初詣もだよな？今年は事情聴取でアースラにいたし」

「はい。そう考えてみれば、結構楽しみですね」

少し笑顔を浮かべる星菜。それにつられて剣也も笑う。

「？どうしてわらっているんですか？」

「いやさ、本当に助けてよかったな・・・って思ってな。俺がかかわらなければ、おそらくみんないなくなっていただろうし」

「そうでしょうね。私は・・・」

と言いかけたところで、突然星菜が震えだした。

「ど、どうした！？」

「いえ、ちょっと良くない想像をしただけです」

「へくしゅん！」
「なのは、風邪？」
「ううん、平気だよお姉ちゃん（なんか、ものすごく失礼なことを言われたような気がするの・・・）。」

「まあとにもかくにもこうやって生きていられるのは素晴らしいことですよ」
「そうだな」
遠くで白い悪魔がくしゃみをしていることも知らず、のほほんとした会話を続ける3人であった。

剣也　ｓｉｄｅ
『ごちそうさまでした！』
俺たちは年越しそばを食べ終え、ゆっくりとテレビを見ながら話していた。
「今年もあと1時間か・・・」
「そうだな・・・舞台を設立して半年以上たっているのだから、だいぶ長い時間を過ごした物だ」
「僕たちが生まれてから1年、ってことでもあるよね！」
げ、すっかり忘れとった・・・
「悪い、ちょっと外出てくる」
「剣也、どこに行くの？」
「大事なこと思い出した。年越しまでには帰ってくる」
二階に上がってコートを羽織り、ネクサスを構える。
「ネクサス、おそらく今年最後のミッションだ」
〜なにかあったんですか！？〜
「ああ。とっても大事な…」
セットアップを済まして、ジャケットを着る。
「プレゼント配達だよ！」

冬空を、全速力で駆け抜けた。

「こんばんはっ！」

「剣也君！？今は結ちゃんか」

辿り着いたのはなのはの家。用があるのは・・・

「士郎さん！翠屋今から開けられますか！？」

「開けられはするが…どうしたんだい？」

「誕生日ケーキをすぐに一つ・・・メッセージ付きで！」

「了解だ！桃子、すぐに行くぞ！」

「わかったわ！」

よし、これでなんとかなる・・・！

結　ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「年明けまで、あと１０分・・・」

「剣也はなにをしておるのだ！」

美妃はいらいらしていた。立ってソファの後ろを右に左に行ったり来たりしている。

「ただいまっ！」

「遅い！今まで何をしていたのだ！？」

「悪い悪い。千早の言葉で思い出してさ」

その手に持っていたのは、一つの箱が入ったビニール袋。

「僕の言葉って、何？」

「開けてみりゃわかる」

星菜がゆっくりとその箱を開ける。その箱に入っていたのは・・・

「誕生日おめでとう、星菜、千早、美妃」

入っていたのは、三人の名前が刻まれたプレートが付いた一つの誕生日ケーキだった。

「なのはの家まで飛んで、高町家総出で誕生日ケーキを超特急で作ってもらったんだ」

「すごい・・・！」
「ありがとね、剣也！」
「・・・感謝するぞ、剣也」
「どういたしまして」
それから三人は、ケーキを食べて・・・
『3，2，1・・・』
年が、開けた。
『ハッピーニューイヤー！』

元旦の神社。当然ながら人でごった返し、剣也たちは行列の中にいた。
「まさか、こんなところで全員そろうとはな・・・」
「にゃはは・・・まあいいんじゃないかな？」
「私は初詣初めてだから、楽しみだな」
「私もこうやってたくさんの人と来るのは久しぶりやな」
「俺も人をおんぶして初詣に来るのは初めてだよ」
「大丈夫？弓弦」
「子狸、食いすぎでふとったのではないか？」
「うっ！」
「車いす生活とはいえ、リハビリのおかげでだいぶ動けるように放ったのでしょう？一日３０分くらい散歩でもしてみればいいのでは？」
「だって、秋においしいもの食べすぎたんやもん・・・」
頬を膨らませるはやて、その下で苦笑いを浮かべる弓弦。
「順番回ってくるから、お賽銭準備しとけよ」
『はーい！』
親みたいな立場の剣也であった。

「さーて、これからどうするよ？」
「ここから一番近いのは私の家やな・・・すごろくとかそういうの

は一式揃っとるけど」
「じゃあはやての家に行くか。みんな大丈夫か？」
『大丈夫（だ、です、だよ）！』
そうして、子供たちは一路はやての家に向かったのであった。

「子烏…我にこのような仕打ちを味あわせるとは！」
「ふふーん、さっき狸って言ったお返しや！」
庭でやった美妃ｖｓはやての羽根つきははやてが圧勝し、美妃の顔にはとんでもない落書きが施されたのは・・・また、別のお話。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５：年越しと初詣（後書き）

～ＮＦＤ寮　１１１１号室～
作「なのはＧＯＤ、予約してきました」
マキナ「よかったですね」
作「特別版＋送料＋代引き手数料込みで１４０００くらい吹き飛ぶけど、まあいい買い物ってことで」
マキナ「テストが終わった後の楽しみがあるってことで、待っておきましょうよ」
作「だな。さーて、テストに向けて全速☆前進☆ＤＡ！」
マキナ「次回の更新までお待ちください。ではまた―！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9905s/

魔法少女リリカルなのはStrikers〜No Future Darkness〜

2011年11月16日19時13分発行